
Night Party

くおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N i g h t P a r t y

【Nコード】

N 3 2 5 7 0

【作者名】

くおん

【あらすじ】

何処とも知れぬ場所で行われる戦いの宴。

ある者は金を賭け。

ある者は体を賭け。

ある者は命を賭け

そんな場所に踏み込んだ少女アイは、同じくそこで生きるボクサーの少女、ケイと戦う。

深夜零時に始まる死闘の勝者は、果たして誰か。

基本、がち殴りあう少女同士の戦いです。
調教などのエロシーンが入る予定ですが、バトルの回、エロの回の
交互掲載になります。

作中の格闘技描写はもっともらしく書いてますがファンタジーな
ので、真に受けなくてください。

アイの章（前書き）

少女同士が殴りあうキャットファイトものです。
調教などのエロ描写が入る予定ですが、そんなにハードなものになりません。

作中の格闘技知識はそれらしく書いてますが、あくまでもファンタジーなので真に受けなくてくださいね。

アイの章

照明が煌々と畳の床を照らす中で、軽く見回すと、いた。道場の日の丸の真正面の壁に背を預け、素足を伸ばして座っている。

少女だ。

少女が座っていた。

黒いスパッツに、セーラー服の上だけという何処か異様な格好だった。

「アンタが、そう？」

低く抑えた声で、その少女が聞いてくる。

「あ、すみません」

アイは靴と鞆を道場の隅に置いて、ブレザーの上着を脱ぎ、少し考えてから立ったままで右足を背中の方に軽く上げて爪先をつまみ、靴下を脱ぐ。次は左足。少しひっかかりはしたが、すぐに脱げた。

「スカート脱がないの？」

と言われて、アイは「あ、大丈夫です」と答える。

「大丈夫ならいいんだけどね。後悔しないなら。念のため聞いているけど、アンタで間違いない、よね？」

「あ、間違いないです。ここで、やるんですよね」

「ここだよ。ここが、今日のナイトパーティーの舞台だよ」

N i g h t P a r t y (アイの章)

アイは柔道場の真ん中でとんとんとその場で小さく跳ねる。

スプリングが利いている。

二メートル離れたところに立っている少女も首を回してから、畳を見下ろした。

「条件は聞いてると思うけど、確認するよ」

「はい」

「武器の使用は不許可」

「はい」

「ただし衣服を使つての締めとかはアリ」

「はい」

「ま、そんならい」

「はい。あ、勝ち負けはどう決めるんです？」

少女は顔を上げ、アイの眼差しを受ける。

「それは、自分らで決めるんだよ」

「審判はいないんですね」

「カメラでの監視はされているけどね」

「そうですか」

「質問はそれだけ？」

「はい」

そう、と少女は言つて、時計に目をやった。

壁にかけられた時計の表示は、十一時五十九分。

「こちらからも質問だけど……負けたらどうなるかは、聞いているよね？」

「聞いてます」

「覚悟はしているんだ」

「負けませんから」

「みんな、そういうつもりでここにきているんだけどな」

声と共にもれでたのは、溜息であつた。

力チリ。

静かな道場の中に、その音はやけに大きく響いた。

零時零分の表示。

アナログ時計の分針と時針が12の上で重なった瞬間。
少女が跳ねた。

飛び込むような右ストレートであった。

ナイトパーティー！。

それは誰が始めたのかも解らない、戦いの夜宴だ。
時に学校で。

時に公民館で。

時に武道館で。

深夜零時に行われる闘争の舞台。

参加者が全員でどれだけ、果たしてどんな人が参加しているのかの全容は知れない。どのような機構がそれを成立させているのかも判然としない。

ただ、その存在は武道・格闘技の世界に携わる者の一部の間に都市伝説じみた胡散臭さで伝わっている。

むしろただの都市伝説の類なのだとアイは思っていた。

アイ それは渾名だ。

対戦者である少女の名前はケイと聞いているが、それだって多分、本名ではないはずだ。

ナイトパーティーで本名を名乗る者は少ない、という。

どう考えても非合法なのだから、むしろ当然ではあるのだろう。

しかしそれは解っていたが、対戦相手のデータがまるで解らないというのはあまり嬉しいことではない。有利不利の条件でいえば向こうも同じはずではあるが、初めての自分に対して、ケイという人は多分、何度か夜宴を経験しているはずだった。

経験の差は絶対的なものではないけれど、戦いなどというものは慣れしているかどうかというのは重要な要因であるに違いなかった。

とはいえ。

（形式はそれなり整ってはいるけど、ほぼ野試合みたいなもの……だとすると、どう仕掛けてくるのかは　　）

自ずと解る。

自分の顔面に伸びる拳を横つ飛びにかわし、前方回転受身の形で立ち上がる。

「ちっ」

ケイの声が聞こえた。会心に近い一撃であつたのだろう。それをまさかこんな簡単に回避されるとは思っていなかったのか。

（飛び込み突き、日拳か　空手か何かか）

立ち上がると同時に両手を前に出し、伸ばした指を向けるように中段の構えをとる。

ケイが「合気道？」と呟いた。呟いてから、後ろに下がりながら何処からか取り出した黒い拳サポーターを嵌める。総合の試合などでみるそれだ。

そしてその場でフットワークを取り始めた。

「今ので、だいたい新人の子はびびるんだけどね。けっこうやるね、あんた」

「そりゃ、どうも」

笑うように声を掛けてくるケイに対して、アイの声は冷たい。

しかし、傍目ほどにも彼女が冷静であるということとはなかった。むしろ、内心の焦燥で心が乱れていると思ってもいい。

（大袈裟によけちゃった……いつもなら、ああいうのは呼吸投げとかでどうにかしていたはずなのに……！）

やはり、場慣れしていない悲しさか。

呼吸を整えて心気の乱れを静めようとしつつ、アイはケイの様子を眺める。観察といってもよかった。

身長160センチ弱。体重は多分、四十キロ程度。

それは自分と大差はない。身長は自分が少し大きい。

ショートカットなのも同じだ。フットワークをとりつつ青紫のへ

アバンドで前髪を押さえたが、自分も何かもつてくればよかったと思っただ。

そういえば鉢巻は血や汗などをとめるためにするのだと昔聞いたことがあったが、同じ理由だろうか。単に髪の毛が戦いでは邪魔だというだけなのだろうけど。

拳サポーターをつけるということは、打撃系か　あるいは総合か。

最近は打撃ができないと総合の世界は厳しいという話も聞いていた。柔術が最強であったというのは、もう十年以上前の話だと。

いずれにせよ、ここに来ているということならば生半の相手であるはずはなかった。

多分、自分とそんなに変わらない年頃のはずではあるけど。

「合気道相手ってのは始めてだけどさ」

ケイはトントンとフットワークで左右に跳ねだす。

「ボクサーの拳に、どう合わせられるか　」

とん、と間合いが詰まった。

最初の左ジャブは距離を測るためだ。

届かないのは承知の上で出された拳が鼻先を掠めても、アイの表情に変化はない。

わずかに腰を捻っての右。

アイの前に出していた右手が動き、ケイの拳の軌道を逸らす。

畳を蹴ってケイはアイの右側面に回り込む。そこからの振り回すような左のフック

正調の格闘技者には慣れぬ側面からの打撃を、視界の外からのフックでこめかみめぐりこむか、あるいは鼓膜を塞ぐように叩くという、彼女のK・O・パターンだ。

アイはそれすらもよけた。

拳が空振りし、相手の姿を見失った時、ケイの顔から初めて余裕が抜けた。

（動きが繋がらない）

焦るな、とアイは自分に言い聞かせる。

同時に逆効果か、とも思う。

そんなことを考えたら余計に焦る。

ひとつひとつの動きを自然に行えばいい。

普段どおりにやれば負けない。

多分。

（古流ってやつか）

最近テレビとかで見るアレだ。

胡散臭い和服を着たおっさんがなんか色々と言ってたりするのを、何度かテレビで見たことがある。

正直な話、身体文化とかそういうのにはあまり興味がない。

ケイは基本的にボクシング一筋だった。

ボクシングだけやっていられたらよかった。

他の格闘技と比べて自分がどれだけ強いとか、そういうことは考えたこともない。ボクシングというスポーツの中で自分がどれだけ戦えるのかだけを考えていた。

全ては過去のことになってしまったけれど。

アイの姿を見失った瞬間、ケイは飛びのいていた。

そして改めて、アイの姿を見る。

さきほどはどうやってかわされたのか、恐らくはボクシングでいうダッキング……しゃがんだのだろうとあたりはつけた。

そこから反撃をしてこなかったのか、考える必要はない。

異種格闘に限らず、戦いの原則はひとつだとケイは考えている。

（自分のペースを貫けばいい……！）

左のジャブ。

左のジャブ。

右左のワンツー。

拳と拳と拳の弾幕。

相手がどういう技を使うのか、それが解らなければとにかく出させなければいいというだけの話である。

相手の体格が倍あるというのならともかくとして、ほぼ自分と同サイズの戦いはどれだけ一方的にラッシュを仕掛けられるかで勝負は決まると考えてもいい。

攻撃は最大の防御とはいうが、そもそもからして防御は難しいのである。

素手の攻防なら尚更のことだ。

ボクシングでは高度なディフェンス技術があるが、それは実はグローブの性能に拠っている部分が大きい。

グローブを嵌めた者同士の戦いでは、拳を掲げるだけでもある程度の打撃の軽減が可能になる。しかし素手での戦いではそう上手くはいかない。腕のガードを通り抜けて拳が飛んでくる。

そして、打撃というのは前に前に向かってすすむものでもある。体重を乗せて足をすすめ、拳を打ち出す。

距離はどんどん縮まる。

防御している人間は後ろに下がるか左右に逃れるしかない。

しかし上体で必死に手を動かしながら足を捌いてゆくというのは、そうそう簡単にできることでもないのだった。

ケイはこのナイトパーティーすでに五回戦っていた。

その五回の戦いはどれも勝利できたが、最初の二回はわけもわからず我武者羅に戦っていただけだった。

彼女が戦術をちゃんと組み立てられるようになったのは、三回目からだ。

それが このラッシュである。

左右の攻撃を相手の何処を狙ってもいいから叩き続けて圧力をかける。

ボクシングでは攻撃できる部位は体の腰から上の前面だけであるが、このルールでは何処を狙ってもいい。そうなると洗練されたボ

クシングの技術は、彼女の戦いに劇的な効果をもたらせた。

側面からの攻撃である。

そもそも、ボクシングにおいて何故攻撃の部位が正面のみに限定されることになったのか？

それは、人間の体というものが側面からの打撃に対して弱いからである。

特に側頭部はただでさえ耳という急所があるのだ。

その上に、人間は視界の外から不意を撃たれると防御姿勢が間に合わず、思いもかけないダメージを負うことがあった。ボクシングにおいてもっともK・O・が高いブローが視界の外から襲ってくるフックなのも、それが原因である。

それらを踏まえたうえでボクシングによって鍛えられて洗練されたフットワークを駆使し、側面からさらにフックという攻撃を使い、ケイは勝利を積み重ねた。

その相手の中には打撃に習熟した者もいたが、ボクサーのフットワークには対処できなかったのか、あるいは場慣れしていないのか、ケイの攻撃の前に沈んだ。

考えてみれば、だいたいのスポーツ格闘技において、戦いは正面に向かい合った者同士の攻防になる。

打撃部位もボクシングほどに限定されている訳ではないが、ほぼ前面と違っていい。戦いで横に回りこまれたからといって、真横から攻撃を仕掛けられるということはまずないのだ。それが反応をほんのわずかに遅らせる。

そのあたりの攻防の感覚は、センス以上に慣れの問題なのだろう。彼女は明らかに、ひとつの独自スタイルを完成させようとしていた。

しかし

拳を、アイは捌いている。

左右の手を使い、逸らし、押さえ。

左右の足を使い、引いて、押して。

ケイのラッシュとフットワークに、手と体の捌きだけで対処している。

むしろケイの方がアイに側面へと廻り込まれかけさえもした。

(コイツ)

巧い。

今まで戦ったどんなボクサーとも、武道家とも違う。

「ツツツ！」

焦りが戦慄に変わった瞬間、彼女は思い切り後ろに飛びのき、息をついた。

アイは前に出ようとしかけて、同じく滑るように畳の上を下がり、間合いを広げた。

そして、ふー、と大きく息を吐いた。

ケイはその様子を見ていたが、その場でとんとんと軽くステップを踏みつつ、現状の再認識にとりかかる。

(余裕があるってわけでもないか……こっちも必死だったけど、向こうも必死だったんだ)

ラッシュを始めて一分という時間であったが、完全に防がれたのはまったく初めてだった。想定すらしたことがない事態だ。

(こっちのパンチとか見えているのか。反撃してこないのは、あの様子だと単純に「できない」と考えた方がいいみたいだけど……)

何故だろう、と考えてからほどなく答えが浮かぶ。

(ハンドスピードか)

アイが一体なんの格闘技か武道をやっているのかの見当はつかないが、恐らくボクサーではあるまいと思った。

ボクサーのハンドスピードに勝る格闘技というのを、ケイは知らない。あるとしたら空手か拳法の類だろうとは考えるが、アイが果たしてそのようなものの使い手なのかどうかは解らない。

いや、のっけの受身での回避、最初の構えから考えて、合気道とかそのようなものではないかと思う。

恐らくはこちらの打撃に対して、反撃の暇を見つけられないのだ

ろう。あるいはそれとも、合気道には打撃技はないのかもしれない。そこまで考えてから。

（そもそも、合気道って、どう戦うんだ？）

護身術としてはよく聞くが、腕を掴まれたり、服を持たれたりする時に使う技術なのではないのか。

仮に殴りかかってきた時に掴んで投げるとしても、素人ならばともかく、打撃の専門家の攻撃を捌けるものなのだろうか。

（ああ、そうか）

結論が、出た。

合気道には、ボクサーと戦える技術がないのだ。

ジャブやストレートを掴みとるだなんて真似ができるはずがない。空手のようなテレフオンパンチというのならまだしもとして、脇を絞り、細かいモーションで繰り出される打撃は、日本の武道を相手に作られた合気道では対処しきれないのだろう。

にもかかわらずアイがケイとの攻防を可能としているのは。

（きつと、凄く目がいいんだ。動体視力とか反射神経とか、むちゃくちゃいいんだ）

その天性ともいう資質が、技術の不足をカバーしている。

本来防ぎきれない打撃を防ぐということを可能としている。

ケイは唇を軽く噛んだ。

それはつまり、アイは自分以上の才能を持っているということの意味していた。

（もしもボクシングや、そうでなくても空手とかされてたら、私では勝てないかもしれない）

素直に思う。

しかし。

（だけど、今なら）

勝てる。

とん、とケイは畳を蹴った。

アイは最初の構えをとり、迎え撃つ。

左から右のワンツーで入る。

アイの両手がそれを捌く。

先ほどと同様の攻防が始まった。

違うのは、互いが互いの動きに慣れたのか、踏み込みがやや深いことだろう。

ケイは踏み込んで打ち、牽制を打ちながら下がる。

アイは下がりながら捌き、牽制を逸らしながら踏み込もうとしてくる。

（やっぱり見えているんだ）

仮にもボクサーの拳を、まったくクリーンヒットさせずに、しかも側面に回り込もうとしてからの打撃にも上手く合わせて捌く。

恐ろしいほどに目がいいのだ。

そして手も早い。

ボクサーの彼女ほどではないが、かなりのものがある。

（本当に、ボクシングされていたら、勝てなかった）

もしも、もしもだが。

もしも、この相手がボクシングをやっていたら、彼女の叔母さんよりも強いボクサーになっていたかも知れないと、そんなことが脳裏を掠めた。

ケイの叔母さんはボクサーだった。

ケイの叔母さんは強いボクサーだった。

ケイの叔母さんは強いボクサーだった、けれど。

プロボクサーにはなれなかった。

実力が足りなかったというわけではない。むしろ、当時において、叔母さんよりも強い同階級のプロの女子ボクサーというのは、世界を探してもそうそういなかったのではないかと思う。世界ランキングで五位以上はあったと、臆目でなしに思う。

もしかしたら、日本ランキングの男子選手ともともに戦えたのではないかというほどにだ。さすがに、上位選手を相手には勝てないだろうけれど。

ケイの叔母さんは、元々は少林寺拳法の選手だった。

高校時代は全国大会の上位入選の常連であったが、卒業と同時にボクシングジムに入って、二年とかけずジムがそれほど大きくなかったということもあるが、所属していた男子選手の誰よりも強くなっていた。

他のジムの女子ボクサーとの交流試合で、彼女は八年の現役時代の間に六十五戦六十三勝二分という驚異的なキャリアを残している。そのほとんどがスパarringに毛の生えたようなものであり、フルラウンドの試合はなかったにしても、これは並みの戦績ではない。その中にはアメリカからきていた、後の世界チャンピオンもいたという。

そんな強い人だったのに、どうしてプロになれなかったのか簡単な話である。

単純に、その時代に女子ボクサーのプロには、日本ではなれなかったからだ。

今でこそ日本プロボクシング協会は女子ボクサーにも門戸を開いてはいるが、前世紀までは頑ななまでに女子ボクサーの試合興行を許可しなかった。ボクシングジムに所属するボクサーはかなりいたが、試合には出させてもらえなかったのである。

今はなくなったが、日本女子ボクシング協会がキックボクシングジムが母体になっていたのもそのことに関係する。

女子ボクサーが試合に出ようとしたら、キックボクシングのジム

に所属していなければならなかったのだ。

ボクシングジムに所属する実力のある女子ボクサーもいたはずである。ケイの叔母さんがそうであり、実際に、そのような選手と女子ボクシング協会の選手とのマッチメイクは試みられていたが、日本ボクシング協会の横槍で多くが成立しなかったという。

勿論、協会がそのようなことをした背景も様々なものがあり、一方的に責められるものではない。

それでも、思う。

それでも、ケイは思う。

そのようなことを知りながらも、思う。

もう少し柔軟に協会が応じてくれていたら。

叔母さんは、プロボクサーになれて、もしかしたら世界チャンピオンになっていたのかもしれない。

いや、きつとなれていたに違いない。

ケイは家庭用のハンディカメラで撮った、叔母さんの最後の試合を見たことがある。

すでに最盛期を過ぎていたにもかかわらず、恐ろしいほどの強さであった。

ごくごく短いラウンドで、発足したばかりとはいえ、日本女子ボクシング協会のプロボクサーを軽々と倒していく。

大人と子どもほどの実力差があった。

みんな口々に「もったいない」と言っていた。ケイだって思った。しかし、もう無理だったのだ。

叔母さんがプロの女子ボクサーとして一線にたつのは、もうその時には無理だったのだ。

一児の母になっていた、叔母さんでは。

フルラウンドを、試合会場の緊張感の中で戦うスタミナがないのだと。

『恨んでないよ』

と叔母さんはいう。

彼女はジムの会長の三男と恋仲になっていた。

それが行動の全てを縛った。

叔母さんには日本でプロになれないのなら、海外にいくという選択肢もあった。実際に、そういうことをしているボクサーもいる。そうしなかったのは、叔母さんには早くから恋人がいたからだった。

恋人を捨てることが、彼女にはできなかったのだ。

『恨んでないよ。本当に』

と叔母さんという。

本当に本気でプロとして戦いたかったら、男を捨てて、ジムを捨てればよかったから。

だからつまり、自分にとってのボクシングというのは、男よりも価値は下なのだと。

はつきりとは口にしなかったけれど。

そんな風に、叔母さんは、だけど何処か憂鬱そうに話していて。

（嘘だ）

とケイは思っている。

今は後進のプロボクサー志願の子に指導している叔母さんを見ると、何か上手くいえないけど、胸の奥底がざわめくのだ。

ボクシングより男をとったとしても。

そのことで後悔はしていなくても。

本当にそうだとしても、

（叔母さんは、全部を出し切りたかったんだ）

それだけは確信できた。

せめて、全力で表舞台で戦えていたのなら。

叔母さんは、もっと明るい顔で笑えていただろう

とん、と踏み込む。

拳を出す。

捌かれる。
拳を出す。
逸らされる。

さつきからその繰り返しだった。

戦慄は感嘆となり、焦燥を通り越して怒りさえ呼んだ。

ケイはなんだか許せなくなった。

自分の攻撃の悉くを捌いてしまう相手の才能にではなくて。

これほどの才能をもちながらも、アイがボクシングや空手などを
選ばず、合気道だか古武道だか何か知らないが、表舞台に立たない
道を選んだということに。

こんな場所で戦う破目になってしまったことに。

怒ってしまったのだ、

それは理不尽極まりない感情ではあった。

その人がどの道を選ぼうとも、自ら望んで、そしてこれほどの力
を得るまでには並大抵ではない努力と覚悟がいったはずだから。

そんなことは解っていた。

だが、思うのだ。

（叔母さん以上の才能の持ち主が、こんなところにくるな　！）

さらに踏み込む。

（きつつ）

アイは相手の圧力が上がったことに気づいた。

気づいたが、だからと言ってどう対処できるというわけでもな
かった。

左右の拳は恐るべき速さであり、フットワークもまた脅威だった。
スプリングが仕込まれた畳は衝撃を吸収する仕掛けになっている
はずだが、ケイのそれを阻害するようなものではないらしい。むし

る反動がついているのではないかと思えた。あらかじめ、ここがどの程度にバネが効くのか、念入りに確かめていたのだろう。

（このままだと押し切られる）

相手の攻撃は解る。

どう来るのか、だいたいタイミングも解っている。

稽古のとおりに動いていたなら、もう勝負はついているはずだ、と思う。

しかしそれがアイにはできないでいた。

（失敗できない）

それを考えることができる時間はない。ただ、心の何処かで恐れているのだと、自分でも解る。

稽古は随分とした。

相手が彼女の兄か、姉弟子でなければ、ほぼ十中八九の割合でそれは成功するはずだった。

（私は怖いんだ）

アイの心の中の最も理性に遠い部分が、だからこそ冷静に答えを出した。

（真剣勝負の場で稽古どおりに動けるか、自信がないんだ）

戦いと稽古とでの間合いの違いが、自分を迷わせている。

実戦では、通常よりも相手との距離が近く感じるという。

よく笑い話としてよく聞く話ではあるが、ヤクザ同士が座敷で切りあいになった際、当人同士は壮絶な戦いをしたつもりであったが、傍目から見えていた芸者を見ると、腰が引けた状態で刀を突き出してチヨンチヨンとやりあっていたただけであったという。

同様の話は幕末にもある。

それは恐怖心の故えであるが

アイは昔、教わったことがある。

『剣は足で切るといふ』

『はい』

『意味合いは二つある。足を進めることによって重心を移動させて斬撃の威力を出すということと』

『はい』

『深く踏み込まないと、真剣で殺傷できる間合いに入れないということだ』

『はい』

『相手の股の間に膝をいれるように踏み込めとか、剣の鰐元で切れ、というわよね』

『姐さん……』

『あ、ごめんなさい、師範クン。自分でいうつもりだったんだよねー』

『そうだけど、茶化さないでくださいよ』

『あの、姐さんも兄さんも、今は稽古中……』

『……恐怖を克服するということは、恐怖を感じなくなることじゃないんだ。例えば ビル火災などで高所から飛び降りていく者がいるが、あれは絶望のあまりに身を投じているのではなく、極限状態で視覚が以上に高まり、距離が近くに感じるからであるという』

『あ、はい』

『死の間際の人間の集中力は、そのようなことを可能とする。脳は恐怖を感じた時、肉体が危機に陥った時、どうにかしようと通常ありえぬ運動を行い』

『まー、ようするにノルアドレナリンの分泌作用なんだけどね。あと扁桃体の』

『姐さん嫌い』

『……二人とも、道場でいちゃついてないで』

『恐怖を克服するということは、恐怖を我が物とすることだよ』

『あるものはなくせないのよ、ちゃん』

『怒りとか恐怖とか、そういうものはなくせない。感情をコントロールするということは、抑制することではなくて、制御するということなんだ』

『
』

『恐怖も怒りも、自分の一部であるということを知ればいい』

『武道とか格闘とかは、そういうもののなのよ』

『感情も肉体も何もかも、五体五情の全て、それこそ全身全霊を以つてことにあたるということは、そういうことだ』

『全てをひつくるめて、？自分？なのよ』

『恐怖を操り、集中を高める』

『必要なのは、それに負けないこと。吞まれないこと』

『降り注ぐ、太刀の下こそ地獄なれ、だ』

『基本でしょ？ 合気道とは、入り身の武道 』

（ 一歩前へ！ ）

踏み込む。

「
ッ」

ケイは拳に今までとは違う感触が当たったのに気づき、それでも反射的に左のフックを繰り出した。

それは初めてアイの顔面を捉えた。

今日初めてのクリーンヒットであり、しかし今までの彼女のキャリアではなかった感触であった。

（硬い）

アイの声が聞こえた。

「いたい」

慌てて拳を引き、次のコンビネーションに移ろうとして

ぞわり

背筋を這い上がる冷たい衝撃を、ケイはその後、一生忘れることはなかった。

全身の筋肉が脈動したかのように、彼女は撥ねた。

それはバックステップなんて言い方の似合わない、もっと衝動的で反射的で本能的な動きだった。

そこからさらにどたと足動かす。もはや、フットワークなとは言えまい。

逃げるような動作だ。

いや。

逃げたのだ。

アイとケイとの距離は五メートル近く広がった。通常の徒手での戦闘ではありえぬ間合いだ。

ケイはフットワークを踏むのをやめ、拳を上げて構えをとった。

（何、この感じ……）

戦いの際に慄くと書いて、戦慄と言う。

ケイは今までの戦歴で、この夜の戦いで、幾度となくそれを感じたことがあった。

感じたつもり、だった。

「いたいけど」

アイは構えを解き、やや前のめりになった姿勢で呟いていた。

「当たったからって、死ぬようなものじゃない」

ぞわり

今の、この感じに、この寒気に比べたら。

今までに感じたそういうのは、ちょっと肌寒い秋風程度のものだ。この感覚は、例えるのなら、極寒の極地に吹きすさぶ嵐だ。

人間の生存など本来許さない、清冽で峻烈な大地の果てに立たされたかのような。

アイは前髪をかきあげて、左右に分ける。

汗をぬぐうためだったのか、髪が乱れたからなのか。

その時にケイの目は、アイの赤くなった額を見た。

（まさか）

額で受けたのか。

ならば打撃が効かなかったのも、あの感触も解らないでもない。

それだけならば、それほど驚くべきことではない。

額の骨は、人体の部位では踵に続いて硬い。

ボクサーでもインファ이터が時に相手の打撃を潰すのに、そこで受けることがある。

姿勢を低くしたら、当たり前のように自然に当たりもする。

むしろ、近接ではそのような場合が大半だろう。

しかし。

しかし。

しかし、この子は

「どう来るのか解っていたんですけどね」
するり、と歩み寄ってくる。

「見えてない打撃をわざと受けるのは、ちょっと勇気がいりました」
「見えてない？」

ケイの表情が訝るものになったのを見たからか、アイの顔に浮かんだのは、今日で初めて見せる笑顔だ。

「見えない攻撃は怖いですけど。怖かったですけど。だけど、」

なんてことはなかったですね。

両手を下げた姿勢で、アイは進んで来る。

「……ッ」

ケイは震える足に力を籠め、それから両手をキツく握り締めてから、緩めた。

無防備に見えるアイが、とてつもなく危険であると彼女は悟っている。

それは直感としか言いようがなく。

ただ、疑問がひとつだけわいていた。

（見えてなくて、どうやって捌いてた？）

殺気を読むとかだろうか。

漫画でよくあるような。

馬鹿な。

いや、しかし。

（そうだ。この子のハンドスピードは私より遅い）

遅くありながらも、間に合っている、ということに彼女は気づくべきであった。

もっというのなら、仮に同じ速度であったとして、先に打たれた拳を、後から出した手で防ぐなどということはできるものではない。技術がどうこうではなくて、物理的に間に合わないのだ。

ならば。

腕は、相手より先か、少なくとも同時に動いてなければ、捌けなはずではないか。

（この子は、私の動きを読み取れている……）

ボクサーでもないのに。

いや、一流のボクサーでもなかなかできないことを、この自分とそんなに変わらない、下手したら中学生程度の少女が可能にしているのだ。

とある番組で、ある世界チャンピオンプラスのボクサーの動体視力を測定したことがあった。

その結果は意外なことに、一般人とさほど変わらないレベルであったという。

それなのに彼はボクサーの拳を受け、回避、カウンターを合わせられるのである。

しかし、分析するとそれがどうして可能なかが解った。彼は目で拳だけを見て避けているのではなくて、相手の重心の移動の床をこする音を感じ取り、それに合わせて動いているのだ。

攻撃の際には重心を移動させるというのはあらゆる格闘技、武術で共通している要素である。

人間にとっての最大のエネルギーは自分の肉体という質量であり、それを効果的に使うには重心移動をしなければならない。

道理である。

ならば、重心の動きを見れば、相手の打つタイミングが解るはずだった。

そのボクサーは、プラスしてリズムを把握している。

動きには一定のリズムがあり、一ラウンド目は相手のそれを掴むのに費やし、二ラウンド目からはそれに合わせて攻撃をする。

実際はほとんどのボクサーは同様のことをしているはずである。

人間の反射神経や動体視力では及ばないレベルでの打撃の攻防をしていれば、必然、そのような技術に至る。

しかし、それらは未だ多くが感覚的な領域であった。

一流のトレーナーを擁する一流のジムであるのならともかくとして、そのような感覚的な技術を鍛えるメソッドは、場末のジムではもっていないというのが現状である。

だが、そのような一流のボクサーにしても、どのような攻撃がどういうところを狙っているのかなどまでは……。

アイの足がようやく止まった。

三メートル。

あそこは。

（あと一歩か）

だらり、と彼女も両手を下げた。

あそこは。

この距離は。

（あと一歩で、お互いを攻められる距離だ）

アイがどのような攻撃手段を持っているのかなどは解らない。

解らないが、ケイにはそれが確かな事実なのだと思う。

そして向こうも、自分の最長射程が把握できているのだ。

どうやって把握したのかは解らないが、それも確かだろう。

（よくわからないけど、動きを読まれている以上は）

読まれない動きをするか、それでもなければ、読まれても捌けない速さを出すしかない。

ならば。

そうするならば。

とんとん、と二度ほど跳ね、また落ち着く。

（最速で、一番リーチの遠い打撃を）

打つ。

（まるで居合いのよう）

呼吸を整えて、脱力した状態に至ったケイを見ていて、アイはそう思う。

古武道の身体操作技術は、スポーツ格闘技など及ばない領域にある、などと自称武道家がほざいていることが、どれだけあてになら

ないかがよく解る。

こと打撃の攻防において、近代ボクシングは古流など及ばない部分を持つている。

その物理的な速さ、駆け引き 生半な型稽古を続けているだけの武道家では、能く抗し得る術などあるまい。

結局、どのような技術を持つているのかではないのだ。

どのように技術を使うのか、それを状況から選択し、組み立てられる者こそが強いのだ。

そして、目の前の相手は最適の選択をとった。

ならば自分もそうするまでだ。

……やがて、

夜の武道館にあるのは、二人の呼吸と、秒針が時間を一秒毎に切り刻む音だけとなった。

その呼吸の音すらもやがて鎮まり、互いの距離からは耳に届かなくなっている。

時計の音は、元より目の前の相手に集中している二人の耳からは除外されていた。

今、この瞬間、ここにあるのは二人だけであった。

アイとケイ。

互いに学んだ技も、ここに至った経緯も違う。

だが、今の二人にとって、もっとも近い相手は

アイにとってケイであり。

ケイにとってアイであった。

アイの感覚の全てはケイの全てを掴むために向けられ、ケイの全ての神経はアイの全てを捉えるために向けられていた。

今の二人ほど、お互いを理解しようとしている者たちは存在すまい。

太極図の陰陽であるかの如く、二人は一つであり、この世界の全

てもあるかのようだ。

宇宙の調和を体現しているかのようであった。

しかし、

その時間は、あるいは永遠にも等しくも刹那に近い、時間にして二十秒にも満たないごくごく僅かなものと終わった。

微笑のまま、何かを諦めたかのように眼差しを細め、アイの右半身が前へ出た。

ケイの拳が上がった。

左。

二メートルの距離を一気に潰す、飛び込むような左のジャブだ。最速の、下段から跳ね上がる鞭のような軌道を全身の脱力状態から繰り出す。

狙うのはジャブの一撃で相手を打倒できる部位 顎。

防御など考えずに出した最速の拳。

アイは右半身から、左半身に前へと出る。

合気道の攻防は、半身からの入り身である。

流れるような動きで、彼女は動いた。

ケイは左の拳が伸びきった時、あるはずの感触がなかったと空を貫いたということを知った。

同時に。

アイの両手は、ケイの胸の高さにまで上がっていた左手首を握っていた。

まるで、そうなるのがあらかじめ決まっていたかのような自然さであった。

ケイが空振りを自覚したのと自分の手首を掌握されたのに気づいたのは同時であり、左肘が上に向けられるのと背筋が逸らされて爪先立ちにされてしまったのは、その次の刹那のことであった。

アイはケイの左手を掴み、そこから剣を振り上げるように手を上げながら反転していた。

そのままケイの背中に回りこみ、右手だけで持った状態になる。

そして

ケイの視界に武道館の照明が入った、と思った瞬間、白い光が全てを埋めた。

合気道の基本中の基本技・四方投げ

彼女がその技のことを知るのは、目が覚めて、自分の敗北の映像を見せられた時にである。

……かくて戦いの夜宴は終わり、夜艶へと続く。

（アイの章2）

「 疲れた」

用意された部屋に戻り、アイはベッドに寝転がる。

稽古で乱捕りなどはよくやったが、真剣勝負がこれほどまでに消耗するだなんて……。

正直な話、もう二度とやりたくないと思った。

そももいかないのだけれど。

それでもアイはもうしたくないと思う。自分は戦いには向いてないのだと改めて思った。

（漫画にでてくるヒロインみたいに、強い奴と戦いたいとか、そういうキャラじゃないのに……私）

というか、そんな人間、実際にいるんだろうか。

アイは自分の師匠と、師範である兄と、姐のことを思う。

「あの人たちは、よくわかんない」

身内であるけれど、精神的な距離ではそんなに近くない気がする。出来損ないの自分と違って、あの人たちは本物の達人だからうつぶせになり、枕に顔を押し付ける。

駄目だ。

考えたくないことを、考えてしまうのは、精神が参っている証拠だ。

楽しいことを考えなくては。楽しくなるような前向きになれることを考えないと。いつまでもイヤなことを考えてしまう。

しかしアイには勝利のことを喜ぶ余裕はない。

自分が勝利するということは相手が敗北することであり、敗北の代償をあの人には支払わなくてはいけないのだ。

（確か、ケイさん、だっけか）

名前は事前に聞いていた。

女子ボクサー。

きつと、あれほどの腕前ならばプロのライセンスをとれるだろう。あるいはもう取得しているのかもしれない。

アイは他の格闘技にそれほど興味があるわけではないので、プロのライセンスをとるのにどういう年齢制限があるのかなどということとはよく知らない。それに、多分、知らずにいた方がいいのだと思った。

「あの人、何を代価にしていたのかな……」

枕に押し付けた唇から、そんな声を出す。

このナイトパーティーは、出演する者に代価を要求する。理不尽な話だ、とアイは思う。

確かにこの戦いで勝てば、それに見合った報酬が得られる。それはあるいは金銭であり、権利であり、情報とか、だ。

しかし敗北は同時に、その対価を支払わせるということである。

そしてそれは、決して負けられない理由になるような　そのよ
うな、それほどのものでなければならぬのだ。

例えば自分のように

ノックの音がした。

顔を起こしてから、誰が来たのかと訝る。

確か今日は、もう誰も来ない……という話だったのだが。

（闇討ちとか）

立ち合いで勝った時は、その身内に気をつける。

兄の言葉だ。

若くして多くの他流試合をこなしていただけあって、その手の話には詳しかった。

曰く、武道家だろうと人間で、さらにその身内に立ち合いの決ま

りを守らせるだなんてな至難の業だと。

まったくもって道理である。

だから、アイはベッドから床に立つと、深呼吸して気合を入れなおす。常在坐臥、常在戦場、というわけにはいかないが、武道家を名乗るのならば一呼吸で戦闘態勢になれるくらいはできなければならない。

用心をしながらドアに向かうかどうかを考えた時、「入らせてもらうわね」と勝手に開いた。

（ここの鍵を持ってる？）

ということは、少なくとも関係者であるということだが

「こんばんわ」

入ってきたのは、数時間前に彼女が倒したボクサーの少女、ケイト、このナイトパーティーの主催側だという女だった。

綺麗な女だった。

会うのは四回目か五回目であるが、顔をあわせるたびにそう思う。まず、長く腰まで届くウェーブのかかった髪が目につく。あんなに長いと手入れも大変だろう。そして紺の地味なスーツに身を包みながらも解るほど、スタイルもいい。極端ではないが凹凸のはつきりとした体型はモデルのようだった。立ち姿も美しい。歩く姿も。

何かの専門の訓練を受けているのだということが、一瞥して解る。顔立ちの彫りの深さからしても、東南アジアか香港か、そちらの方の女優みたいだなと感じたことがある。

あるいはそれが正解かも知れない。

あれは誰から聞いたのだろうか。

『香港の女優は、みな嗜み程度には武術を身につけている』

柔らかな微笑を浮かべながら部屋に入る彼女は、

「お話があります」

とケイを連れてアイの寝室まで行く。

有無を言わさない。

アイはどう応じていいのかも解らず、二人から目を離さずにさっきまで自分のいた寝室にまでいく。その際にケイと目が合ったが、それだけでひどく嫌な感じがした。

戦いの時には、あれほどに強く鋭かった眼差しが、やけに弱弱しくなっている。怯えているかのようだった。

（何か……ろくでもないことをされそうな……）

しかし何なのだろうか。

建前ではこのナイトパーティーでは、勝者となった者に課されるペナルティはないはずだった。

女は椅子を二つ用意して自分とケイで座り、アイにベッドに座るように促した。

そして全員が座席したことを確認してから。

「実は、ケイさんの調教を貴女にお願いしたいのです」

微笑のままに、とんでもないことを口にした。

さすがにアイも「は？」と口を開きっぱなしにしてしまい、思わず女とケイの顔を見比べる。

女の顔は相変わらずであつたが、ケイは俯いている。膝の上に置いた手は硬く握り締められて震えていた。

「調教　って、何を？　その、ケイさんに何か教えろってことですか？　そのウチの合気道の技とかそういうのを教えろとか」

「それはそれで面白そうなお話ですが、このたびのご提案はそういうことではございません」

「えと……その」

「このナイトパーティーは、自分の手持ちのものを賭けて、戦うものです」

「それは」

知っている。今更だ。

しかし自分は勝者であり、望むモノの一つはさつき手に入れた。
これ以上の取引は、少なくともケイとの間に生じるはずはなかったはずだった。

女は言葉を続ける。

「土地、大金、身内や恋人を賭けにして臨む人もいますが 武道家はそれなりに裕福か、そうでなければたいてい貧乏です。そして、この夜宴に出てくるような人は多くが後者です。それは理解できませんか？」

「……………ええ」

武道や格闘技を学ぶには、それなりの時間がかかる。

時間は現代社会において金と同義であった。人は、ただ時間を潰して生きているだけで金がかかる。

そして、武道に限らず生きていくのに必要な技ではない習い事でそれなりの腕前になろうという人間は。それを習得するための時間を搾り出すための金をつくり出さなければならぬのだ。

それゆえに、一芸に通じた者はというのは必然的にある程度裕福な層の人間が多くなる。

現代の武道家で古流の宗家や師範という人間は、かなりの割合で地方名士と呼ばれていたり、町で中小や零細の規模でも社長などをしていたり資産家だったりするのだが、それはそういう事情があることである。

勿論、貧乏でバイトをしながら道場に通い詰めて技術を習得する人間もいないでもないが、古流の場合は初伝だの中伝だので大金を払わなくてはいけないことが多く、免許皆伝ともなれば盛大に宴席を主催しなければならぬこともある。

当然のようにその費用は皆伝を貰う側が用意しなければならない。毎月の月謝も馬鹿にならない上にそんなでは、とても貧乏人が免許皆伝など無理な話であった。

幕末には、腕前がありながらも家の台所事情で免許皆伝を辞退し続けた剣客の話もある。

現在でもその辺りはあまり変わらない。

そういう事情は古流だけかというと、空手や柔道のような現代武道にしても、毎月毎月の月謝、昇段試験のための費用、などなどは莫大でこそないが地味にきつい。

それに日々仕事に追われる中で稽古に通えるというのは、よほどに情熱が続かないと無理だ。

近世までならともかくとして、現代の日本では武道や格闘技のスキルで直接金銭を得られる機会は皆無に等しいのだから。

アイは合気道などを伝える家の人間である。

合気道は厳密には古武道ではないが、そのあたりの事情はだいたいわかっていて、自分がその辺りの人に比べても恵まれている環境にあるという自覚もある。

女が言っていること……いわんとしてしていることの予想は見当がつかないでもない。

ただ、それが果たして自分にどう関係するのか、それが解らないのだ。

「それで、ケイさんは　詳しい事情は話せませんが、まあ、後者の方に当たります」

「……………」

「つまり、」

「貴女と同じく、自分自身を賭けたのですよ」

「……………」

アイはケイを見つめた。

ケイは瞼を伏せて俯いていたままだ。

「具体的に、どれだけの報酬があったのかについては言えませんが、一試合の勝利で、それなりのまとまった金額をケイさんは受け取っ

ていました。しかし」

貴女に、今日敗北した……それをこの女は相変わらずの微笑みの表情のままで言ったのだ。

アイは一度目を閉じると、「それで」と応える。

「私に何の関係があるんですか？」

「本来、私どもは勝者に報酬を、敗者にペナルティを渡すことだけが基本的な役割です。多少の手数料はいただきますが、それ以上のことは仕事にないのですよ。まあ、Amazonのユーズドみたいなものですね。このナイトパーティーは」

この大規模で非合法的な鬩いを、女はネット販売のサービスのよう

に語る。

「……ですから、私になんの関係が」

「ですが、Amazonで売買をするにもクレジットカードが必要なんですよ？」

「……話がよく見えません」

「信用がいる、ということですよ」

そこで女は立ち上がり、まるでそのような舞があるかのような動きでケイの後ろに廻った。

「ケイさんはいいんです。彼女はお金を受け取っています。ですから、この催しの関係者であるということから言い逃れができません」

「……それは、」

女は笑みを深め、両手でケイの顎を救い上げるようにした。

ケイは苦しそうな表情のままで、それに逆らうでもなく顔を上げる。

「だけど、貴女は違います」

「貴女の報酬は、お金でも権利でもありません」

「組織としては、貴女をどう扱うべきか図りかねているのですよ」

「つまり、私にも手を汚せと……そうおっしゃるわけですか」

女は静かに頷いた。

アイは考える。

女の言っていることは、そんなに間違っているわけではない。

自分の報酬として要求したものは、確かに組織の力がなくては手に入らないものだ。だが、それでも、それだけで罪に問えるようなものでもないのも確かである。

それでも

（理不尽だ）

自分がこんなことをする必要はないように思える。

ここでつっぱねても、問題はないはずだ。

「まあ、本来、こちらから勝者である貴女に強制できることではないのです」

女は、アイが何かを言う前にそう遮る。

こちらの呼吸を掴まれていると感じた。やはり、相当に使えるのではなからうか。

「こちらも、ことのついでですからね」

「だったら、」

「ケイさんを、売り飛ばせばすむだけの話ですので」

「……………」

予想はしていた。

予想はしていた台詞だったが、思わずアイは立ち上がりかけた。だめだ、と理性の何処かで制止がかかる。

ここでいれ以上話しては駄目だ。

これ以上関わっていたら、抜け出せなくなる……。

女はアイの表情から内心をどう読み取ったのか、ケイの背中に胸を預けるようにのしかかり、首に腕を巻きつける。それは締め技をすけているとかではなくて、あくまでもじゃれついているかのようだ。

それでもケイは苦しそうに唇を噛み、沈黙している。何かに耐えているかのようだった。

「そんなことを言えば……私が承諾するとも思っているんですか？」

覚悟はできているはずだ。

そう、アイは思った。

自分自身を賭けているということは、そういうことだ。

敗者のことをいちいち同情していたら、戦えない。

もう、戦えなくなる。

それに、だって、ケイさんもそのようにして何人もの夢を潰してきたはずだった。

だから、これは自業自得なのだ……因果応報というべきか、闘いの螺旋の果てに彼女がどこにたどり着いたとしても、それは自分の責任ではないか……。

「私としては、この提案は全員にとって幸せになるベターなものだと思いますよ？」

女は笑顔のままだ。

「ケイさんはひどい目に遭わず 程度問題ですが 再び試合に臨むことができます。何せ、売り飛ばされた先でどういうことになるのかは、私にもそれこそもう二度と目の目を見ることなどできなくなるのに等しいことですから。」

私どもとしても、優秀なファイターであるケイさんには、再戦してもらった方が嬉しいですね。

アイさんも、ちょっとした手間で私どもから信用を得られるのは、いいことだと思います。こちらとしても、身内となればもう少し便宜が図れるというものです。

それに、

ケイさんがひどい目に遭ってないと知っている方が、貴女も気が楽でしょう。

囁くように、言った。

アイは何かを言おうとしたが、自分でも何を言おうとしたのか解らなくなった。

ただ、自分がケイの運命を握っているということだけを漠然と認識している。

認識はしていたが、自分がどうすればいいのかということがまったく解らない。

だから、

「私は、どうすればいいんです？」
と聞いた。

呆然とした声であった。

女の笑みが、この上なく深くなる。

アイの頭がまだ正常に働いているのなら、それを悪魔のそれと認めたかもしれない。

慈愛に満ちた笑顔で、女は言った。

「舐めさせなさい」

「舐めさせるって、」

「あら、私としたことが忘れてました」

質問に答えずに立ち上がった女は、両手をケイの肩の上に置いた。

「こういう時は、その前に最初に宣誓させるのでしたわ」

「センセイ？」

「隷属の契約の、です。さてケイさん、どのように言うのかは、あらかじめ言っておりますよね？」

女は腰を曲げて、ケイの耳元で囁く。

ケイは唇を噛み、女の顔を見た。

嫌がっているというよりも、怖がっているようにアイには思えた。

「さあ」

優しく促され、ケイはやがて椅子から滑り落ちるように床の上に

座りなおす。

そして顔を上げ、

「このたびは、私のような愚鈍な負け犬の調教を引き受けていただき、ありがとうございます」

！

アイは目を見開いた。

ケイのことはよく知らない。知らないのだが、彼女がどれほどに強いのか、そのことは知っている。

この人の拳は鋭くて速くて、

「私、雌犬のケイは貴女様のご調教で躰けられることとなり、この上なく光栄でございます」

眼差しには決意と覚悟を兼ねそろえた強い光が宿って、

「どうかこの卑しくて愚鈍な雌犬であるこの私を、思う存分に躰けてくださいませ」

生半の武道家など及ばぬ身体能力は、あるいは達人の域で、

「貴女様が下さるのであれば、鞭であろうと喜んでいただきます」

とてもとても強いボクサーなのに

「舐めると申されましたならば、……」

「どうしました？」

女の声に打たれたように首を振る。

アイは、彼女の目尻を流れる涙を確かに見た。

「舐めろと申されましたならば、貴女様の足でも、……どこでも、舐めさせていただき　　ます」

そして、両手について、深々と額を床にこすりつけるように頭を下げる。

それは一言でいうのなら、プライドの欠片も感じられない土下座であった。

「どうか、よろしくお願いいたします」

（どうかって、どうかって言われても……そんなこと言われても……）

アイは戸惑っていた。いや、もっというのなら混乱のきわみだった。

調教、という言葉がどういうことを意味しているのかということ、アイにだって解る。

彼女だって現在の女子高生だ。

漫画や小説も読むし、ドラマだって見る。

稽古が趣味みたいなもので、そんなにのめりこんだりはしないけれど。

それでもエロい漫画の二冊や三冊は待っている。というか、近頃の少女漫画はセックスとか普通にでてくる。監禁調教が出てくるものだって、読んだことはあるのだ。

（つまり、この人を、雌犬として、いや、だけど、そんなこと、どうやれば……）

喉が鳴った。

目の前で土下座する女の子を自分が犯して嬲っているというイメージが思い浮かばない。

浮かばないが、漫画で見たイヤらしいポーズをさせられている女の子に、ケイの姿を重ねてみる。

上手くいかなかった。

それでもじつとケイを眺めていると、胸の中でもややもやする感じが湧き出してきた。

（なんでこの人は、こんなことをしているのか　　）
悲しくなった。

この人は、あれほどの腕前なのに。
自分とあれほどに戦えた人なのに。

それなのにこんな卑猥な言葉を言わされて、土下座させられている。

（お金のため）

仕方の無いことだと思う。

仕方の無いことだ。

お金が無いと、何もできない。

ケイはきつと、どうしてもお金が要るのだろう。高校生程度の女の子がどうあがいても手に入らないような大金が必要なのだろう。

そうでなければ、こんな恥知らずな真似はできやしない。

それでも、なんだかアイは悲しくなった。

嫌悪も覚えた。それは少女らしい潔癖さからではあるが、確かに、僅かにも軽蔑した。

嫌悪と憐憫とが軽蔑とが同時に湧き出している中で、アイは女の言葉を思い出す。

『舐めさせなさい』

「なめて、みて」

左手を差し出す。

座ったままの姿勢で。

ケイはその言葉に漸く顔を上げた。全ての感情が抜け落ちたような顔だった。絶望と諦観に満ちた顔だった。

アイの差し出した左手の指にむかい、背を反らして首を伸ばす。

ぴちやり、

舌先がアイの左手の人差し指に触れた。

（気持ち悪い）

素直にそう思った。

汚い、とも。

やめて、と叫びたくなる。

しかしそれはできない。ケイの顔を見ると我慢するしかできなかった。

彼女は泣いていたのだ。

だけど。

（これからどうしたらいいのかしら……）

迷いのままに指を舐めさせているが、他にどうしたらいいのかというこの見当もつかない。

そこに、

「気持ちいいですか？」

女が、言った。

いつの間にか元の椅子に座っている。膝を組んで、その膝の上に肘をつけて顎を乗せて面白そうに眺めている。

アイとケイは同時にそちらを見るが、ケイは慌てて指へと舌を這わせる。

アイはどう答えていいのかも解らなかったが。

静かに首を振った。

ここで調教なんだから「殴りなさい」とか言われたらどうしようか、と思っただが、女は「そうよね」とあっさりと同意する。

「素人のご主人様に、芸の仕込みもまだの雌犬では、そんな簡単には気持ちよくなかならないでしょうね」

「……………」

アイは目を落とし、ケイはその言葉に動きを止め、うなだれる。
女は笑ったまま。

「難しく考える必要はないんですよ？」
と言った。

「最初は 奉仕させるつもりで、命じるといいんです」

「ほうし……………」

「それだけでは、わかりにくいですか。そうね。何でも目的が解りにくいと、どうしていいのか解らなくなりますものね。

調教も武道も一緒。私も調教をお頼みしましたけど、どういう風に、ということは言わなかったのはすみません。「舐めさせなさい」といっただけで大体解ると思いますが」
すつと立ち上がる。

そして足をケイの後ろからスカートの下に左足の爪先を入れた。

「ひっ」

反射的に立ち上がろうとしたケイだが、「動くな、雌犬」と女の声に硬直する。

「動いちゃ駄目よ雌犬…………… アイ様、この雌犬を躰けるということは、アイ様にとつての便利な道具にすればよいということなのです」

「様って、その、道具」

その時になって、アイはこの女の口調が変わっているということに気づいた。

ケイを雌犬と呼び捨ててあからさまに侮蔑して、アイに対して様とつけて口調が敬語のようになっていいる。

（宣誓したからだ）

直感的にそれをアイは理解する。

ケイは自ら宣誓して雌犬であると頭を下げ、アイはそれに応えて指を舐めると「命じた」。

すでに 契約は成立していたのだ。

ぞっとした。

取り返しがつかないことをしたと、このときになってアイは改めて思った。

思ったが、本当にもうどうにもならない。

女の爪先は少しだけ浮いているケイのお尻の真ん中に入り込み、動いていた。スカートの下ではどのようなことは解らないが、動き、弄くっているということだけが解る。

「うっ、あう、ん、あ…」

ケイは顔を紅くして目を強く閉じた。初めての羞恥による表情の変化だ。何かを感じているというのではなくて、恥ずかしいことをされているということの、それを見られているということによる羞恥である。

「アイ様、雌犬は人間ではないのです。道具なのです。より使いやすい道具として躑けるのです。」

貴女を気持ちよくする道具として、躑けるのです。

お解りになりますか？

道具は大切に扱わなくてははいけません。

ですが、気遣う必要はないのです。重ねて言いますが、人間ではないのですから」

「そ れは」

「遠慮などなさる必要は無いのですよ？ アイ様。貴女は、この雌犬を使つて気持ちよくなる権利を持っているのですから」

「」

「この犬も言っていたでしょう？ 貴女の何処でも舐めると。何処でも、です。遠慮などなさらずに命じればいいのです。あなたが気持ちよくなるために使えばよろしいのです。」

「さあ」

スカートを掴み、持ち上げようとした時、アイの頭の中の冷静な一部分が囁いていた。

（何をするつもり？ そして、何をさせるつもり？）
知れている。

この雌犬を躡けるためだ。

躡けるため

顔に赤みがさす。

あまりの事態の急変においてけぼりにされた思考が、ようやく追いついたのである。

しかし、こうなってしまうては彼女自身にもどうにもできないように思えた。

足元で両手をついてはいつくばり、必死に組織の女に足で責められているのに耐えているケイがいる。いや、もう雌犬というべきなのだろうか。

ほんの少し前にアイと戦った女ボクサーとは、とても思えない痴態だった。

『遠慮などなさらずに命じればいいのです。あなたが気持ちよくなるために使えばよろしいのです』

女はそういつていた。

この雌犬を使えと。

気持ちよくなるために使えと。

『舐めさせなさい』とも。

それは、つまり……。

「アイ様」

女は躊躇っているアイをみかねたのか、何処か声の調子を低くしていた。

「この雌犬は愚鈍です、ですから

何処を舐めるのか、具体的に言わないといけません」

「！」

それは。

さすがに恥ずかしい と思った。

はずだった。

羞恥に真っ赤に染まった顔のままに、アイの口は言葉を紡いでいた。

「を」

恥ずかしい。

恥ずかしいのに、声は止まらない。口は動き続ける。

「私の を、舐めなさい」

言ってしまった……。

もう、本当に後戻りできない。

ここから先へと突き進むだけしかない。

奇妙な感じだった。冷たい興奮感ともいふべきか、自分が異常な事態に巻き込まれて心臓が早鐘を鳴らすように鼓動しているのに、頭の中身はひどく冷静に世界を眺めている。

舐めなさい。

そう言った時に、何かが自分の中で決定的に切れてしまったのだとアイは思った。

（私は、もう……）

たくしあげたスカートの中を呆然と見ていたケイであつたが、一度目を伏せてから、何かを諦めたように顔を上げて、両手を挙げた。ショーツへと手をかけようとしている　と見えた。さすがに下半身の筋肉が強張った。

男子ほど深刻ではないが、女子の股間も急所である。そこを無防備にさせているというのは武道家ならずとも緊張する。ましてそこを舐める、というのはそれ以上に恥ずかしいことだった。

ケイの指がアイのショーツの左右の端にかかる。そこがずり降ろされていき、やがてアイの性器が露わになったあたりで止まった。無意識の内にアイが内腿を寄せてしまつてゐる。

何処か困つたようにケイは女の方へと振り向いて指示を仰ぐが、女は黙っていた。そして、笑っていた。

ケイは再びアイの性器を見る。

見ている。

（恥ずかしい……じつと見ないで……お願いだから……）

内腿と股間にかかる息の感触で、ケイがどちらを向いているのか解る。かつてないほどの緊張でアイの肌は過敏になっていた。暖かい吐息は上下している。股間に近づき、やがて遠ざかつて。それを何度も繰り返した。

（……早くして……早く終わらせて……）

アイは一秒でも早くこの屈辱と羞恥の時間を終わらせたかった。

そう。屈辱なのだ。

自分が主人としてケイを躡けなくてはならない　というのは、一見して嗜虐的なシチュエーションであるが、それは彼女が望んでそうしている訳ではない。

ほとんど強制されて誘導されて、普段は決して口にしないような卑猥な言葉を吐かせられ、そして物心ついてからは決して他人の手も目も届かない場所を他人に見させる。

恥ずかしい。

呼吸を整えようとするが、上手くいかない。

いかに達人にも近い技量を持つアイといえど、想定したこともない状況ではその技量のほども発揮のしようもないようだった。

ケイはアイの足が動かないのに焦れたように、一度顔を離す。雌犬と罵られて執情的な奉仕を強制させられるにしても、何某かの使命感のようなものが生まれるのかもしれない。

そして、アイの両膝を握った。無理やりに開かせようと決めたらしい。

「だ、だめ！」

アイは反射的にスカートから手を離し、力を入れ始めたケイの頭を抑える。

スカートに隠れて見えないが、ケイは恨みがましい目で自分のご主人様を見上げて

「何をしている、この雌犬！」

女が足を上げ、ケイの尻を蹴った。

それはさして力を入れたようではなかったが、突然のことに「きやつ」とケイは声をあげた。

「この雌犬が！　ご主人様に断りも無く何をしようとした！」

そう言って、何度も蹴る。蹴りつける。

「あ、その、だって、舐めろって、言われた、言われましたから、やめ、やめて、ください、やめて」

あわれっぽく懇願するケイであったが、アイは慌てて「やめて」

と叫んだ。

ぴたりと女は動きを止める。

「アイ様」

「はい……」

何処か非難するような眼差しを受けて、彼女は項垂れる。

「この雌犬は貴女が望んでおられないことをしようとしたので、このように躑けましたが」

だけど。

「それでも、命令を果たそうと努力しようとしたのも確かなのです」

「」

「アイ様が望まれないのなら、仕方ありません。この雌犬は処分することにしますが」

「それは……」

アイはケイと女を交互に見た。今日、この夜、果たして自分は何度こうしただろうかと思った。

覚悟は決めていた。決めていたつもりだった。それでも、まだ足りなかったようだった。

彼女は自分の両足を力を込めて膝を外に向けるように立ち方を変えた。

そして、再びスカートをたくし上げる。

「舐めなさい」

もう一度、口にする。

「私のショーツをおろして、貴女の唇で私の……、下の口にキスしなさい。舌で舐めまわしなさい。私が、私が 気持ちがよくなるまで、私のを舐めまわしなさいッ」

最後は叫ぶようになった。

ケイの目がアイの顔を見てから。

「ありがとうございます」

土下座して。

そして、本当の奉仕の時間が始まった。

アイは自らを慰めたことがある。

自分の性器に指で触り、ささやかな乳房をもみ上げ、乳首を人差し指の腹で撫でたことがある。

どという切欠があつてそうしてみようと思ったのかなどは忘れた。枕元に広げた雑誌の中では、美形の少年に「おしおき」される、少年よりも五つくらい年上のメイドの少女の姿があつた。

「ん……うん……ん……」

快感は、あつた。確かに、あつた。

さすがに最初からではないが、何度か重ねてやっているうちにいわゆる「イク」というのにも、なんとなくだが、至ったことがある。それでも例えば漫画なんかでよく出てくるような激しい絶頂感はない。

頭の中が真っ白になるくらいに気持ちよくなる、なんていわれているけれど。

『あんなの漫画の中だけよお』

中学の時に「体験」を済ませていたような友達は、よくそんなことを言っていた。

気持ちいい。気持ちはいいけど、それで我を無くすほどの絶頂なんか、少なくとも自分は知らない。

『ま、演技でそういう風にしてあげているけどねー』
とのことである。

アイは「そんなものか」と思った。いかにもありそうだな、とも。現実にはそんな派手でも凄いものでもないのだろう。多分。

あるいはその時の彼女は、それを確かめようとしたのかも知れない。

どうしてかその日に限って家には誰もおらず、確実に誰もいないということが解っていた。

強いて切欠と呼ぶに足るものを探すのならばそれくらいだ。

たまに読んでた雑誌を本棚から取り出して、広げて、最初から直接触るのは怖かったので、シヨーツの上から陰唇を撫でてみた。

「あつ……ん……ああ……」

激しい絶頂というのなかったが、気持ちよかったのは確かだった。それからアイは何度か、家人の誰もいない日に自慰をした。

下着の上から撫でていた指はいつしか強く押し付けるようになり、自らの中に第一関節までだが差し込むまでに至った。

そして何度目かを感じたあの感じ　真っ白というほどではないが、視界の端に火花が出るような全身に奔る衝撃　あれが、多分「イク」というやつなんだろうなとアイは思っている。

最初にそれを得た時、さすがに「凄い」と思った。

そして　ほどなくして、アイはそれをするとはなくなった。

何もマスターベーションに対して嫌悪感を抱いたというのではない。まったくない、といえば嘘になる。彼女はどちらかといえば潔癖な少女だ。

性的なことに興味はあるが、表立ってはそんなに顕すことは無いし、風俗で働いているという女性たちの苦境は頭で理解しながらも、やはり生理的な嫌悪感が先立つ。

そんな少女ではあるが、その時に感じたのは嫌悪という以上に「恐怖」だった。

アイは、怖くなったのである。

何かこれ以上をとるに至るのは駄目だと。

取り返しのつかないことになるのではないかと。

それは未知の感覚に対する当たり前の反応ではあった。

漫画で読んだような激しいものではなかったにせよ、今のこの感覚の延長に、得体の知れない何かがあるように思えてならなかったのである。

ここで年頃の処女としての興味に優先させて、抑圧する形で以降の自流行為をやめたのは、やはり彼女が武道家として自己の制御を心がけていたからだろう。

彼女の兄なり姉弟子なりは「抑制と制御は違う」といつていたが、さすがに性的な事柄についてまでそれが該当するか否か。

アイは、自分にはそれができるのだと思っていた。

なんとなく。

「ああっ」

それは、まったく根拠がない、ただの思い込みだったけれど。

ケイは、それでも最初こそはためらい勝ちにアイの股間に口付けた。口付けたままで舌を出して、大きく下から上へと舐め上げる。

アイは「ひうつ」と悲鳴のような声をあげかけて噛み潰す。気持ちいいとかそういうのは解らないが、今まで感じたことのない感覚だった。

（指とは違う）

当たり前だった。

彼女の体は同年代の少女と比べても柔らかいが、自分自身を舐めて慰めたいなどと思ったことはない。

自分の指ではなく、他人の、しかも濡れた粘膜の感触というのはまったくの未知のものであった。

舌の動きははじめはただ上下していたものであったが、やがて自分の口の中で分泌された唾液を乗せて縦に横にと複雑に動きだした。

「あっ……っっ」

アイの声は切なげであった。歯を食いしばって声を出すのを抗っていたが、それにも限度があるらしかった。目はきつくとじられて腕はスカートの端をつまみあげていたものが、強く握られている。

他人に舐められるだなんて、気持ちが悪いと思った。思っていた。無理やりに与えられる刺激で気持ちよくなるなんて嘘だと思った。思っていた。

ぴちゃぴちゃと音が聞こえる。

「ねえ、雌犬、アイ様の下のお口はどんなお味？」

女が聞いた。

しかしケイは応えない。一心不乱にアイの股間に顔を埋めて唇と舌を動かしている。

自分を無視したケイに対し、しかし女はむしろ笑みを深めた。

『私が 気持ちがよくなるまで、舐めまわしなさいッ』

アイの出した命令に応えているのだと知れたからだ。

アイの、ご主人様の命令に反することをすれば折檻を受ける。それは即ち、命令を聞けば折檻をされないということである。当たり前前のことではあるが、その当たり前を当たり前に行わせるために「躰け」をする。

今奉仕をやめて女に応えたのなら、また折檻を受けることになる

とケイは判断しているのだろう。
そして、それは正しい。

女はするりと滑るように前へと歩き、目を閉じているアイの耳元にまで顔を寄せると、艶のある声で囁いた。

「濡れて、きていますね」

「！」

こんなことは予想の範疇だった。

心ならずも性器を舐められたり指でふれられているところを「濡れている」と言われるのは、それこそいやらしい漫画などではよくある状況だった。

アイが最初に自慰に使った少女漫画でもそういうシーンがあった。そこでそう囁かれているのは、調教を受けている方のはずであつたが。

（あ、やだ……）

実際に言われることがあつたとしても、そんなことで自分の体が反応するだなんて信じたくなかった。

しかし、アイはその囁きを聞いた途端、自分自身が流す蜜の量が増したと自覚した。

そう。

すでに彼女自身は言われるまでも無く濡れていたのだ。

それは粘膜が刺激を受ければ当たり前のように分泌されるものであつて、消して快楽に囚われているということの意味しない。しかし、彼女はそのことを知らなかった。それにぴりぴりとした衝撃にも似た刺激は確かにある。

そしてその衝撃は、ケイの舌の動き一つ一つで、アイの芯の部分に届こうと積み重ねられていた。

女の言葉は、そんなさなかに楔のように打ち込まれたのである。

「……気持ちいいんでしょう?」

優しい声だった。

アイは目を開けた、女の顔が見える。

笑っている。

母のように笑っている。

優しく微笑んでいる。

「雌犬の御奉仕で、気持ちよくなっているんでしょう?」

「あ、あああつ」

アイが声を荒げたのは、女が優しい微笑のままにケイの頭を押したからだった。

彼女の性器に奉仕するためにケイは顔を埋めていたが、まだ恐れがあるのか、唇と舌は表面を撫でるようにしていただけだ。

そこに力をかけられて、ケイの顔がアイの急所へと押し付けられたのである。

「んっ」

ケイの鼻が触れたのは、アイの中心にあり、包皮に包まれていた陰核であった。

普段の自慰でもほとんど触れずにいて、風呂に入るときにもシャワーを当てる洗う程度のことしかしないそこから、軽くだが刺激臭がしたのだ。

耐えられないほどの強い匂いがした訳ではない。

耐えられなかったのは、アイの方だった。

今まで受けていた花弁への奉仕で包皮の中の花芯が肥大化しつつあったところに、なんの予告もなしに皮越しとはいえ刺激を受けたのだから。

視界の隅に火花が散り、背筋が弓なりに反れた。

反射的にスカートを握っていた手をそのままケイの後頭部に当て、自ら押し付けた。

そして、バランスを崩してベッドに背中から倒れる。

「ああ……………」

「はあ、はあ、はあ……………」

必死に奉仕していたためか、呼吸が荒くなっていたケイは、そのまま倒れたアイの両膝を手を添えて広げて顔をもう一度寄せた。奉仕の続きをするつもりだった。今度は、アイは何も言わなかった。

「あ」

誰があげた声か、微かに驚くように出され、やがて続いての滴が落ちる音に飲み込まれた。

「や、やだ……………」

アイは顔をおさえようとして、力が入らずに涙を流した。

ちろちろと、彼女の股間から放出された金色の水流がケイの顔を濡らしたのだ。

「よくできました」

涙に歪んだ視界の中で、アイは自分の排泄物を受けて安心していいケイの顔が見えた。

転章（前書き）

ちよつとエロというか、スカトロっぽいけど苦手な人は注意

転章

「ん……」

下半身に刺激を受けて、シャーロットは顔を起こした。

視界にあるのは白いタイルと白い湯気であり、視線を落とせば名前もよく知らない少女のヴァギナがある。

湯気の向こう側からは喘ぐような声が聞こえてくる。

（そうか……ここは、私以外の人もいっぱいいるんだ）

ぼんやりとした頭で、そんなことを考える。

シャーロットは自分がどうしてここにいるんだろうかと思った。

彼女はつい二ヶ月前まで、ロンドンで普通にハイスクールに通っている女学生だった。

普通でなかった部分があるとするのなら、彼女は祖父より格闘技を学んでいたということだろう。それもレスリングとかボクシングのようなメジャーなものではない。

かのシャーロック・ホームズが使用したとされる格闘技・バリツのモデルにもなったという護身術バーティスだ。

バーティスは、バートン・ライトという人物によって創始されたという格闘技である。

バートン・ライトという人物の履歴は現在ではよく解っていない。元々護身術に興味がある土木技師で、サバット、ボクシング、ラ・カンなどの各国の武術・格闘技を研究していた。

三年ほど日本に在住し、講道館他幾つかの柔術を学び、帰国した後、後に創始したのがバーティスである。

その技法は「柔術にボクシングと棒術をくわえた新しい護身術」ということであり、現在の総合格闘技の前身と呼べるべきものであった。

コナン・ドイルはそのバーティスが紹介された記事を読んでホームズが使う武術にしたと言うのが定説だ。バリツというのはバーテ

イスの誤記であるというのだ。

現代ではイギリスのシャーロキアンですらもこのバリツのことを知る者は少数になり、バーティスともなるとさらに小数のマニアの研究対象になっただけであるという。

シャーロットの祖父は、このバーティスを学んだと称していた。ありえぬことではあるまい。バートンは1951年まで存命であったのだから、1930年生まれの祖父がバーティスを学ぶ機会は充分にある。ただ、武道だの格闘技だのの世界では、過去の履歴を僭称するということは普通にある。

彼女の祖父も、自分で幾つかの武術を組み合わせるバーティスを詐称していたのかも知れないが、
今となっては解らないことである。

それでも、シャーロットはバーティスの強さというのを疑っていなかった。バーティスというシステムについて信頼していた、というべきか。

対武器を視野にいれた、打撃、組討を組み合わせた完成度の高い格闘技として。

シャーロット自身も柔道とレスリングとボクシングを学校のサークルで学んだが、ただ単純に組み合わせたとしてもバーティスにはならない。これらをまとめて一つの格闘技に仕上げるにはセンスがいる。そう思った。

彼女の祖父がバートンに習わずにこれらを完成させたとしたら、まず間違いなく天才の類であつたに違いない。

シャーロットは現代格闘技を並行に学びながら、バーティスを身につけた。

身につけて、アマチュアの総合格闘技の大会に出場し、何度も優勝している。

それだけなら、シャーロットはただ格闘技を学んでいるというだけの少女に過ぎなかったが、妹の失踪という事件が全てを変えた。

妹が日本に旅行中に起きたそれは、未だにシャーロットにもどう

いうことが起きたのかは定かではない。

ただ、この国にやってきた彼女が妹の行方を知るために参加したのが、このナイトパーティーと呼ばれる非合法なNHBである。

ここではあらゆるものが報酬として支払われる。

金、地位、権利、そして……、情報。

情報があればよかったが、なくても調査のために金が要る。

シャーロットは自身のパーティーを信じていた。

バーティスの技と精神を受け継ぎ、弛まぬ鍛錬を積み重ねている自分の技量を信じていた。

ロンドンにできた総合格闘技のジムでも、その実力を確かめてもいる。

日本がいかに武道の大国であり、バーティスの源流がある国であり、世界の総合格闘技の中心である土地であるとしても

よもや、そう簡単に敗れることもあるまいと、思っていた。

実際に彼女は三度の戦いに勝った。

総合の女。

空手の女。

キックの女。

どれも、強敵であった。

それでも彼女は勝った。

一度の戦いごとに自分の力が強くなっていくのも知れた。経験の積み重ねはそのまま力となっていくのだ。

このままいけば、勝ち続けられると思った。

情報も僅かであるが集まり始めていたし、そのための資金も手に入った。

次の試合に勝って……そう思っていた。

そして、完膚なきまでに敗れた。

恐ろしい強さだった。

今まで戦った少女たちも同年代ではそう滅多にいないであろう使い手であったが、その女の強さは格別であり、もっというのなら異常ですらあった。

シャーロットよりも頭一つ分の背の高さがあるとは言え、その打撃の速さ、重さは常識では到底あり得ぬものだ。

その女　カンフー使い（シャーロットの認識ではそれ以上のことはよく解らない）のメイシンは、彼女を従属させると宣言した。

もとより、それは覚悟していたことではあった。

自分自身を賭けの対象にしていたのであり、そのリスクは折込ずくであったのだから。

それでも、まさか、こんな風な……陵辱を受けるだなんて。

利尿剤、搔痒剤、媚薬　そのような薬を投与され、シャーロットはただの一日で人間としての尊厳を失った。

人前で排泄を強制され、痒みに我を失って、無理やりに昂ぶらせられて喘ぎ声を出した。

幾度と無く身も世も無い絶望的な絶頂感に追い込まれ、彼女はその女に完全に服従すると誓った。

そして誓った彼女を、女は「献上する」と言っただのである。

「んく……」

シャーロットは気だるげな声を出す。

先ほどから断続的に続いていた愛撫が再開されたのである。

生暖かくて細いものが自分の後ろの孔に挿入されてくるのを感じた。

本来排泄に使用する場所に何かが入り込むのは異様な感覚であった。そして、もうそれを快楽と感じ始めている自分にも気づいている。少女の上にうつぶせで乗せられて、両足を蛙のように開かされた姿勢で股間を他人の顔に向けていても、もう羞恥は感じない。顔を伏せたところにある少女の性器へと舌を伸ばし、少女の最も敏感な部分を舌先で撫でるように舐めた。

「うん。いいこだね。シャーロット姉さまは」

本当に嬉しそうな声が聞こえた。

この少女のことはよくは知らない。知らないが、確かレスリングを使うのだと聞いたような気がする。

そういえば、去年に映像でみた、世界大会に出たレスリングサークルの先輩が闘った日本の少女が、こんな顔をしていたような覚えもあるが　気のせいだろうと思った。

14歳で世界大会で優勝したほどの逸材が、よもやこんなアンダーグラウンドに堕ち、自分の一番汚い部分を弄っているだなんてありえない。

余計なことを考えるのも煩わしくなって、シャーロットは思い切ったように少女の突起を唇で挟む。豆粒ほどのそれを唇すぼめて左右にこすると、少女は、

「いいよ、凄くいいよ、シャーロット姉さまはとても上手だよオッ」と叫んだ。

浴場の中で少女の叫び声は煩いほどに響く。

競うようにあちらこちらから喘ぐ声が大きくなった。

あるいは、こんなことでさえも少女たちは競い、争っているというのだろうか。

湯気の向こう側から、紺色のスーツ姿の女が現れた。

シャーロットの主人……元主人というべきか、カンフーを使う女、メイシンだ。

メイシンはストッキングを履いたままで、浴室の濡れたタイルの

上を歩いていて、調教を受けている自分の元奴隷を見つけると、優しく微笑んだ。

「そのままでもいいわよ」

そういったのは、慌てて身体を起こして挨拶をしようとしたシャーロットを止めるためである。

「もう、シャーロット姉さまはっ」

動いちゃだめだよ、と少女は言っつて、広げたシャーロットの脚を両手を上げてから脇に挟みこみ、彼女の後孔に顔を押し付ける。

「あうっ」

「うん、美味しいよ。シャーロット姉さまのお尻、綺麗な色でとても美味しいよ」

そんなことを言いながら、舌先を孔の中に潜り込ませた。

すでに排泄物はこの浴場に入る前に全て出しつくして洗浄していたが。

「汚い！ 汚いの！ そこは駄目！」

シャーロットは叫び、暴れようとする。

少女はそれを無視して、強力な力で脚をホールドしたままで舌を動かした。シャーロットの脚は最初こそばたついていたが、一分とたたぬうちに動かなくなり、何かに耐えるように震えだした。

「シャーロット、その子はここで一番お尻を舐めるのが大好きな子なのよ。よく舐めてもらって、立派な奴隷に調教してもらいなさいね」

メイシンの言葉に答える余裕もない彼女は、ただただ喘ぎ声を出すほかは無かった

「 楽しそうね」

声がした。

女の声だ。

その声に、浴場の全てが沈黙した。

湯気の向こうから聞こえていた声も止まり、シャーロットを賤けていた少女も硬直し、メイシンも姿勢を正してその場で右膝を落とした。

「いいわ、そのまま続けなさい」

声はそうつぶられたが、それでも少女の腕からは力が抜けた。自由に脚を動かせるようになって、しかしシャーロットは何もせず、その声が近づいてくる方向を見ていた。

湯気の向こうから新たに現れたその人は 当たり前のように女性だった。

そして、身に何もつけぬ全裸であった。

身長は多分、170センチ弱……近頃の女性としてはさほど大柄ではないが、やはりまだ長身と呼べる部類であるように思えた。

体の肉付きは格闘技者とか武道家としては、などという言葉は不要なほどに完璧な肢体である。上向きの乳房、くびれた腰、ほどよく大きくも引き締まった尻

その体の上に載った顔もまた、美しかった。

東洋人の女性はアングロサクソンの目からは幼く見えるのだが、その人の美貌は少女のようでありながらも凄絶な色気を感じさせるものだった。オーラ、というべきなのかも知れない。

この人こそが、ナイトパーティーの中心にあり、頂点に立つ女王

「献上」された時に顔を見たきりであったが、ここでもうして全裸で立っているのを見ると、改めてその格の違いのようなものを感じる。

果たしてどのような技を使うのか。

【女王】は跪くメイシンの前にまで歩み寄る。

「メイシン、報告を」

「はい」

自分を思うままに蹂躪し、陵辱した女が畏まっている。

それだけで、シャーロットはなんとも言えない気分になった。

「予定通りです。予定通りにアイ様は最初の戦いに勝利し、最初の奴隷を得ました」

「そう……」

そのやりとりでどれほどの意味があり、あるいはどのような意味があるのか。

【女王】は静かに瞼を伏せ、メイシンもまたそれに倣って目を閉じた。

やがて。

「貴女には、ご褒美を上げないといけないわね」

「はいッ」

声を上ずらせたメイシンは、もう片方の膝も落とし、両手をタイルの床につけて顔を上げる。

【女王】はわずかに脚を広げ、メイシンの頭を優しく両手で包みこんだ。

そして、自らの股間に導く。

（あ、あああああああ）

シャーロットは声も出せずに悲鳴をあげた。

自分を圧倒した女が。

自分を従属させた女が。

忠誠を誓ったご主人様が。

【女王】の　を飲んでいる。

喉を鳴らして、恍惚とした表情で飲んでいる。

その全てを飲み込むことはできなかったのか、唇の端から流れた湯気をだす金色の流れがメイシンのスーツを濡らしていた。

（そんな……あつ、そんな……）

何か、最初の敗北よりも深い何かにシャーロットの精神は飲み込まれた。

それを幾度となく感じて、しかしなおその最果てに自分はまだ至っていなかったのだと彼女は知った。

それは、本当の絶望であった。

N i g h t P a r t y （アイの章） エピローグ 了

マイの章

自分にあるのは空手だった。

空手だけだった。

それ以外の何もかもは、ただ知っていることではなくて。

真実　自分の身につけている、自分のものだと言えるものは。

父より受け継いだ空手だけだった。
だから。

彼女が、マイがただひとつだけ手に入れて、自分のものだと、自分自身だと唯一胸を張っていえるモノであるその空手をつれて、彼女はこの夜宴に降り立ったのだった。

N i g h t　P a r t y（マイの章）

専門の道場を持てる流派というのは少数派である。

多くの流派が自治体の運営する青少年センターや公民館などを使って、週に二度か三度の割合で指導していることが多い。

だから、という訳でもないがマイがその公民館を訪れた時は、何処か懐かしくなった。

小さな公民館である。

三階建てではあるがワンフロアの広さはたいしたことはない。二十畳ほどの広さだ。

（どこにもたようなものなんだ）

ごく当たり前のことではあるが、入ってから見廻してそう思う。

マイが父に指導を受けていたのは、やはりこのような公民館だった。こんなところで多くて十数人か、少なくて五人ほどの門下生と共に稽古をしていたのである。

電器がついてても何処か薄暗いその真ん中にまで歩き出すと、マイは胴着を調える。

真っ白な空手の胴着だ。

流派名をプリントした自分のは使えない。だから、新調した。真新しい胴着の匂いというのは何処か落ち着かなかった。

この公民館まで胴着を着て歩いてきたが、別に誰も不審な顔をすることはなかった。

今時でも武道を習う人間は多い。実際、やはり同じような胴着の少年少女とすれ違ってもいた。

（あの人たちは多分、少林寺拳法だよな）

この辺りに空手の道場があるとかいう話は聞いたことがなかった。多分、少林寺拳法かさもなければ日本拳法か。

（あんまり気にしても仕方ないけど）

集中しよう、と両手で腰の帯を掴む。
そして。

かっ

こっ

呼吸法。

自然に両手は帯から離れて、掌はそれぞれが上下で大きく円を描くように動いていた。

転掌。

那覇手の流れを汲む剛柔流の開祖・宮城長順の創案になるという受けの型である。

マイの父は首里手を極めるのにその精魂を傾けたが、最初に習ったのは剛柔流系の道場であった。

剛柔流の型も自分の中にとりこみ、ことその他、この転掌と三戦を重視していた。

『試合の前に、これをする と 落ち着く』

生前に、父はそういつていた。

呼吸と動きの一致がなければ、この型は上手くこなせない。

全ての動きが終わると、拍手が鳴った。

「貴女が私の相手ですか？」

振り向いた先はこのフロアの入り口であり、そこに立つのは一人の少女であった。

ブレザーの制服のまま、少女は中に入る。

「ええ」

「合気道ですね」

一瞥して、マイはそう言った。

ブレザーの少女　アイは、足を止めてマイの顔を凝視する。

マイは幼い顔に精一杯の凶悪な笑みを浮かべ、自然体に構えた。

「あと五分です」

アナログの時計が壁にかかっていて、静かに音を上げて時間を切り刻んでいた。

アイは靴下を脱ぎ、公民館の真ん中へと歩いていく。

傍目には落ち着いているように見えたが、そうではなかった。

（こちらの流儀を見抜かれた……昔の武芸者なら、そういうことがわりと簡単に出来たらしいけど）

まるで時代劇だと思った。

互いに剣を構えた状態でにらみ合っただけで相手の流派を識別し合っているのである。

今の自分は構えどころか服装も学生服のままであるが。

合気道の源流である大東流合気柔術の名人・武田惣角は、一瞥でその人間の学んだ流派は元より、そこに集団で習いに来ていたら、その集団の中で誰がどういう格付けであるのかを瞬時に見抜くことができたという。

さすがに惣角のような真似はそうそうあるできる話ではないが、別の流派の人間がとある流派を学びにきた際に、申告してないのに僅かな動きや姿勢などで流派を見抜いたなどということは聞く話である。

人間の身体というのは訓練に応じて特殊化していく。

空手家には空手家の筋肉のつき方があり、柔道家には柔道の試合にふさわしい筋肉のつき方がある。

陸上選手でも、長距離走の選手などは脈拍が長くなるという。

だから、観察眼に優れた人間ならば相手の微かな動きから相手の流派を見抜くことは可能なだろう。

アイ自身にも似たようなことができるという自信はある。

あるが、それを口にするのではない。

間違っていると恥ずかしいからであるが。

（この子、よほどに確信があったのね）

そもそも合気道家の動きの特徴というのはどういうものか、それを知っていたとすると

（この年で、かなりの経験を積んでいる……）

マイはどうみても中学生に入りたて程度にしか見えなかった。

つい去年まで小学生だったような、小さな女の子だ。

しかし決して長身といえない自分よりも、なお頭半分小さなこの女の子が、絶対に油断のできない相手なのだとアイは確信していた。さきほど見せた転掌の型、そして今の自分の流派を見抜いたという言動。

こちらを動揺させようとしたのたのただろう。
この子は兵法というものを心得ている。

達人

きつと、このようなことが簡単に出来る人間のことを、そう呼ぶのだ。

（かなり、使えそうです）

マイは自分の目の前の二メートルの位置に立つアイを見て、そう思う。

重心が据わっている。

そして歩く姿も綺麗だった。

肩がちつとも上下しない。

するすると滑るように前進していた。

（まるで父さんみたい）

と素直に思った。

それはマイにしてみたら、最大限の賛辞であった。

互いに右前の自然体で向かい合う。

秒針の音が聞こえる。

あと二十秒…十秒…

かちり

日付が変わった。

ナイトパーティーが始まった。

ナイトパーティー。

それは誰が始めたのかも解らない、戦いの夜宴だ。

時に学校で。

時に公民館で。

時に武道館で。

深夜零時に行われる闘争の舞台。

参加者が全員でどれだけ、果たしてどんな人が参加しているのかの全容は知れない。どのような機構がそれを成立させているのかも判然としない。

ただ、その存在は武道・格闘技の世界に携わる者の一部の間に都市伝説じみた胡散臭さで伝わっている。

そのような戦いがあるということは、マイは父から聞いていた。マイというのは、この場に赴くために作った彼女の呼び名である。

非合法なこの戦いでは、多くの者が本名を名乗らないという。マイもそうしたまだった。

よもや、自分がそれに参加することになろうとは、ちっとも思っていないなかったけれど。

（父さんは、現在の合戦場のようなものだろうとは言ってたけど）合戦場というのは、かつて沖縄で空手家同士が決闘していた場所のことだというのが。

そんな場所で喧嘩同然に試合することを『掛け試し』と言っていたらしい。

琉球王国が明治になって日本にとりこまれた一時期、治安の悪化

した頃に特に流行っていたが、詳細はほとんど知られていない。

年嵩のいった名人はそのような風潮を批判していたともいうが、若き日はその彼らもそこで戦って技を磨いていたともいう。

マイの父は、幕末の頃に中国より伝わった拳術が、その掛け試しによって「唐手」として完成していったのだと語っていた。

それは自分の得た実感によるものだろうとマイは推測している。

彼女の父親は、あの人は恐らく古伝空手における最後の実戦の名人だったろうから

戦いが始まってからも静かに佇んでいるアイを見ていたマイは、その悠然たる立ち姿に、父のそれを見出していた。

（強い……かなり、強い）

マイはまだ十代前半の少女だった。

少女だったが、目付けには自信があった。

父と父に付き従う数少ない弟子たちの稽古を見ていたからである。

武道において、修行の環境には重大な意味がある。特に周囲の人間のレベルが高いと、自然とレベルの高い動きを目で見えて覚えることになる。脳はそのイメージを元に動きを再現しようと身体に指令を送るのだ。

勿論、達人の動きを簡単に再現できるものではないが。

そのように指導者の動きを目で見えて覚えるのを、見取り稽古という。

マイは日常の生活と道場での修業とで、自分の父とその弟子たちがどれほどの使い手であるのかを認識していた。

その弟子の中には元合気道家や中国拳法、柔道でひとかどの使い手だった者も多い。

そのことから目の前の少女の流儀を合気道だと看破できたのだ。

そして、アイという少女がそれに近い、あるいはそれ以上の境地にいるということもはっきりと悟っていた。

（流派は合気道 だけど）

少なくとも、父の弟子の元合気道家だった人よりも上だと思った。

だからと言って。

（ここで引けない）
構える。

（どうみても、中学とかだよね……）

改めてアイは思った。

下手したら、小学生かも知れない。

アイはそう見て取った。

女の子の成長はだいたい十二、三歳の時分には、ほぼピークに達する。

骨格はそこで完成し、ホルモンの作用によって肉付きなどが変化していくのだ。

目の前の空手使いと思しき少女は、アイの眼から見ても十代をどれほどを過ぎたようにも見えなかった。

そして、驚くべきはそんな歳でありながらも完成された風格が感じられることだった。

（空手と戦うのは始めてじゃないけど、この子が使うのは多分、古流）

確かあの？ 転掌？ の型は、那覇手に属していたと聞いているが……。

両手を構えたマイを見て、アイは微かに眉をひそめた。

（あれは）

脇を締めたままに右手を前にして左手を右手の肘の辺りに添えた、手の甲を下に向けた構えだった。

やや腰を落とした右前の立ち方になっていた。

（やっぱり伝統派とかじゃない）

アイも歩き出し

派手な音をたて、手と手が交叉した。

いつの間にか間合いを詰めていたマイの右手がアイのコメカミを狙い、それをアイの左手が受けたのである。

そこからアイの手がマイの手に絡み付こうとしたのに間をおかずマイの添えられた左拳は摺りあがり。

撥ねるようにアイは後ろに飛び退いた。

マイはそこから間合いを詰めようとしたが、アイが隙なく着地したのを見届けると静かに息を吐く。

（今、一瞬で間合いを詰められた）

恐らく、膝の力を抜くことによる重心の落下 そのことによる

筋肉を極力使わない移動法だ。

古武道の世界ではたまに聞く。

相手に気づかれずに接近する技法である。

人間の脳は相手の動き目で見て判断しているが、実際に見えている情報が脳内で映像となるには若干のタイムラグが生じる。そのタイムラグを埋めるために、脳は視覚情報を元に映像を捏造する。

そう。

人間が見ているものは、実際のそれとは異なるものなのだ。

その捏造情報は、しかし捏造とは言っても例えば相手の筋肉の動きなどの既知の経験から予想されたものであり、多くの場合はほぼ正確なものである。そういう脳の辻褄あわせによって、本来は捉え切れない速度のボールを打ち返し、見えないはずの打撃を回避し得

るのである。

無拍子というのは、その人間の脳のメカニズムを利用した技だ。筋肉を使わない、重心落下による移動という日常にありえない動作を使われると、脳は認知できない。できても滅多に無いことによる処理をすることによって速度は遅くなる。

倒地法ともいう。

勿論、これは結局は「見慣れない動作」ということに集約されるものであり、経験されると通じなくなる。

アイがマイの打撃を受けられたのは、以前に同様の技法を仕掛けられての稽古をしたことがあるからだった。

それでも、アイ以外のどれほどの人間が同様のことができたか。

マイの手は自然な動きであり、その上で鞭のような速度としなりを持つていたのだ。

「凄いです」

とマイが笑っていた。

幼い顔立ちに似合わない、凶悪な笑み。

「痛い」

アイはそれだけを言い返した。

（今のを受けられるとは思わなかった）

マイは精一杯怖く見せた笑顔を浮かべつつ、内心で驚いていた。

倒地法からの打ち込みは、父が生前に得意としていた打撃で、古くは沖縄空手の実戦派の名人、本部朝基が大正時代にボクサーを相手に仕掛けたという技である。

観客も仕掛けられた方も、朝基がどのような技を使ったのかがよく解らなかったといわれる。それほどの早業だ。

そこから受けられて手首の関節を捕られ掛けたが、咄嗟に外せた。

今の打を受けられた上にそんなことを仕掛けられるのは、まったくマイにとっては未知の事態である。

相手が飛び退いてくれたが、こちらも攻め切れたかどうか、確信が持てなかった。

（危なかった）

ちよつと焦っていたから。

焦りは容易に隙となるからだ。

お互いがお互いを脅威と見ていた。

アイはそれでも呼吸を乱さずに静かに前と進み。

マイもまた、最初と同様に足を踏み出した。

（勝てないかもしれない）

マイは思う。

今を受けられたということは、こちらの攻撃が読めるということである。

合気道の技法をマイは熟知している訳ではないが、父の弟子だった元合気道家の人はこう言っていた。

『合気道の技は、相手の動きを高確率で察知していないと使いにくい』

そのために手刀受けなどで相手の動きを察知する訓練をするのだという。

そんな程度のことです相手の打撃に反応できるのかということにつ

いては、かつてグレイシー柔術が世間に出始めた頃のホイスの対打撃の訓練などを例に挙げて説明していた。

『パートナーに両手のパンチを一分ほど繰り出してもらって、それを捌くという訓練をする。それだけで対打撃の訓練になってたそう
だ』

要するに、相手の動きを読み取る目付けを身につけるためのものであり、古い時代の古流における組太刀や約束組手なども同様の効果を狙っていたのだろう、とその人は言っていた。

しかし、合気道の手刀受けにしてもグレイシー柔術のその訓練にしても、最近の打撃技術の発達についていけるのかということについて疑問があり、その人は空手の研究を始め いつの間にか、空手家として父の元で学んでいたのだという。

父の空手は、その人がそれまで学んでいた合気道と共通する技術があり、そしてより素晴らしい技術と理念があるのだと。

『型、そして鍛錬法は伝統を受け継ぎながらも最新の科学の成果をも踏まえたものです。武術のメソッドとして、現在の私の知る合気道を含めたあらゆる武術より完成している』

だが、とその人は言っていた。

『メソッドの完成度とは関係なしに、その何千人もの修行者のいる格闘体系の中には、一人や二人はその理論を体現できる天才児がいる』

合気道の世界にもいるのだと言った。

相手の打撃がどんなものだろうと察知し、捌き切るような達人が。

『何せ開祖はピストルの弾を予測してかわしたなんて伝説があるからなあ』

その人はそこで笑った。

さすがにそれはただの伝説なのだと思っているらしい。

だけど、とマイは思う。

目の前の、今のを初見で捌き切るような人がいるのなら、その延

長に、その果てに、そういうことができる人が出てくるかも知れないと。

だけど。

だけど。

だけど。

（だからって、負けられない）

負けてなんかられないと、マイは拳を作った。

父に伝えられた最初のこと。

それは、空手のテイジクン（鉄拳）だった。

マイの父親は空手家であつたが、世間にはほとんど知られていなかった。

当たり前である。

沖縄の武士の出というわけでもない、大学生から空手を始めたという人で、大会などに出てもいいところ二回戦突破程度にしか進められなかったと言う、何処にでもいるような空手選手だったからだ。

就職してからも、一応は大学に指導しにきていた師範がやっていた講習会に参加していたが、それこそ趣味の範囲である。たまにある連休などを利用しての合宿などには参加する程度には熱心だったが、結婚してからはその合宿にも参加しなくなっていた。

そんな程度の、ありふれた空手家と名乗るのもはばかれるような若者だった。

そんな父が変わったのは、結婚して三年目、講習会に特別に招待されていた流派の総帥の師匠と言う、沖縄の空手の先生に出会ってからである。

総帥の師匠、というのはつまり総帥はその先生の元で学んでから独立して流派を立てたということであるが、総帥とその先生との間は良好であり続けていた、らしい。

その総帥にしてもさらにその先生にしても、マイが物心ついた頃には亡くなっていたので、どういう関係であったのかということは彼女もよく知らない。

父がたまに語ってくれていたことをまとめると、総帥は沖縄の古伝に学びながらも、本土で空手家として流派をやっていくには全空連に加盟に参加していた方が有利だからとそこに入り、「伝統派」として古伝をゆがめざるを得なくなったということである。

奇妙に聞こえるかもしれないが、いわゆる伝統派空手というのは古流の空手とは言い難い。

勿論、流派内では一部の人間にその流派の理念を伝えるべく型を研鑽し、伝えていたりもするが

指導者として、選手として評価を受けるには、試合で勝てるようにならなくてはいけないのだ。

試合と実戦とは違う、とはよく言われる言説ではあるが、少なくとも空手においては実戦の中から編み出された型の技は、試合ではほとんど活かされることはない。

まったく使えないということでもないのだが、そのような技はほぼ例外と考えてもいい。

試合にはルールがあり、ルールがその試合での戦法を形作っている。

ボクシングやレスリングなどは、そのルールの名前と呼んでも過言ではない。スポーツ格闘技というものはそういうものである。

しかし、空手はスポーツではない。

武道である。

試合は試合であり、別のものなのだ。

総帥は、少なくともそう考えていたのだと、父は言っていた。

スポーツ格闘技としてのカラテは、それでも青少年の育成という教育者の立場からは肯定せざるを得ず、流派を維持するためには選手を試合に出し、そのために指導する他はないのだ。

それでも、ある程度の年配の人間のための空手として、自分の学んだ古伝を伝えることは出来る

そんな理念があったのだらうと。

全ては父の推測である。あるいは理想であり、もっといえば妄言なのかも知れなかった。

総帥もその先生も亡くなってから十年もたたずして、その流派は普通の伝統派空手として現在も試合に選手を輩出し続けているのだから。

だけど、父がそんなことを考えていても仕方ないのだとマイは思う。

それだけ、父にとつてのその先生との出会いは運命的であり、以降の自分の人生を決定付ける出来事であったのだから。

『うん。筋がいい』

父は不器用というほどでもなかったが、器用だとか天才的だとか言われるような選手ではなかった。

ただ、型をやりこんでいた。

型の演武も試合の一分野としてあるからだ。

三十を目前にして試合出ることも億劫になっていた父は、演武の方にウエイトを移していた。

勿論、組手で体を痛めていては仕事に差し支えるなどという理由もあったが。

たまたまその講習会で型を重視しているのが父だけだったのか、

先生は流派の原型である「那覇手」としての型を伝授した。

それは幾つかあるが、特に転掌と三戦をである。

試合に対する情熱もなくなり、あくまで趣味としての空手をやるうとしていた父は、この型の空手に熱中した。

魅入られたのだと言ってもよかった。

型をやりこみ、分解し、解説を受けてそれを試す。

この頃に父の空手の基本は完成したと思っ

ていい。そして次の転機は間もなく訪れた。

休日にも母と出かけた父は、その出先でたまたまチンピラに絡まれ咄嗟に三戦の型の技で反撃してしまったのである。

その時にチンピラの一人は数日間の意識不明となつて、その男の実家がそここの家柄であることもあつて、父は訴えられた。

身重だった母を護るためであり、向こうが先に手出しをしてきたということもあつて、裁判では正当防衛が認められたが。

しかし、正当防衛を認められたとは言え、あくまでも暴力事件で裁判沙汰になったということでは会社は父に退社を迫り、流派もまた裁判の決着がつくまではほとんど破門状態で出入りが禁止され、結審した後に講習会に出ても何処か腫れ物に触るような扱いを受けた。

父は孤立した。

会社を退社して実家に戻り、数ヶ月思案した後に父がとつた行動は、空手を極めるということである。

どういつ葛藤があつたのか、マイはよく解らない。自分なら、人に怪我を負わせてしまったのならば正当防衛であろうとも空手をやめてしまったのではないかとも思う。

後から考えると、父はこの時に目覚めたのではないのか。

趣味に空手をやるのではなく、その人生を空手に捧げる武道家として。

臨月の母を連れて沖縄に移住した父は、その地で首里手の名人と出会い、弟子入りした。

そして自分が生まれ　そこからの十年間が、自分の人生で一番幸せではなかったかとマイは思っている。

沖縄にいたのは五歳までだったが、本土に戻ってから父は自分の空手を練り、そして遂に流派を立てた。

流派とは言つても、ほとんど門弟などがないという弱小流派だった。

日本に現存する武道の流派というのは、多くがそのようなものである。

沖縄古伝と称して公民館で教えていたが、一人の月謝はいいところ五千円か一万円というのが相場だ。父が設定したのは五千円であるが、それはより数を集めるということを意図したものだろう。

ただ、毎回稽古にくる面子というのは限られていたし、月謝を払ってくれるのはその面子よりも多かったが、それでも全員で十五人程度である。

公民館を借りるのにも金がいるし、その程度ではとうてい生活はたちゆかない。

父も母も仕事に出ていた。

世間的に見て、空手は副業でしかなかった。

そんな訳で、本土に戻ってからの最初の五年間は、貧しいとまではいなくても、何処か質素な生活をしていたとマイは記憶している。

それでも楽しかったのは、父は充実した日々を送っていたからであり、母はそんな父にたまに愚痴をこぼしながらも、たいした不満もなく生活していたからであろう。

しかし、いつの頃からか父は変わった。

大金を持ち帰るようになり、酒の量が増えた。

雰囲気は何処か荒んでいた。家族や弟子に当り散らすようなことは無かったが、何処か近寄りがたいものを感じ始めた。

それがどういう意味なのかをマイが知るのは、ずっと後の……今から半年前、念願の道場を建てた直後に、父が交通事故で死んでからである。

『借金を払ってもらいたい』

葬式が終わった直後にそういつてきたのは、弟子の一人ではあるが週に一度くらいしか出てこなかった男である。

その男が暴力団指定こそは受けていないものの、いわゆるヤクザであるというのはその時に初めて知った。

人当たりも良く、自分をよく可愛がってくれていたこの男を、マイはそれほど嫌いではなかった。だが思い返せば、父の雰囲気荒

みだしたのは、この男が入門した直後ではなかったか。

男は父が自分たちに指導し、時に組と組の間で行われるトトカル
チヨ　いわゆる賭博行為に選手として参加していたということを
語った。

どういう経緯があつてそのようなことになったのかは、後で知つ
たが、弟子の一人が組の人間と揉めて、それを解決しようとして関
わつた拳句のことであつたらしい。

武道家とやくざの繋がりとは古来からあるものだが、父はできるだ
けそういうものとは無縁でいようとしていた。

だが、弟子がヤクザと揉めた時に、それでも見捨てられなかった。

もしかしたら、過去に自分が揉め事を起こしたを時、組織が護つ
てくれなかったというのがトラウマになつていたのかもしれない。

ともあれ、父はやくざと関係を持つた。

そのことによつて、実は父はそれほど不利益を蒙っていない。

賭け試合は大使館などによつて行われていて警察が介入すること
はなかったし、報酬はたいしたものがあった。

試合は確かに危険な相手とすることになつていたのだが、負けた
からといって制裁を受けるでもないし、そもそもからして父は確か
に名人で、ほぼなんでもありの試合で後れを取ることは無かった。

やくざ達の方も、先生先生と優遇していたらしい。

自分たちに利益をもたらしてくれる相手なのだから当然である。

道場建設の準備金を用意するほどに、入れ込んでくれていた。

しかし

父は死んだ。

予定されていた収入は見込めなくなった。

そうになると、彼らはとりあえず資金を回収しなくてはならない。

まず借金のカタに道場の権利を確保し、あとは父の弟子の誰かを
立てて……という絵図面を立てていたようだ。

残されたマイとその母親も、別に無理に働かせる必要もないし、

もつと言えばマイは「宗家の娘」であり、空手の腕前は天才的だった。

今後マスコミに売り込みにかけるのにも有利な材料になると彼らが考えても不思議ではない。

実際にそういうプランも提示されている。

だけど。

だけど、マイにも母にもそれは受け入れ難いものだった。

経済的には父を亡くした自分たちのためにもなる。

流派としてもやくざが手を回してくれるのならば、マスメディアに宣伝もできる。

それでも。

それでも。

それでも。

マイは、父の残してくれた空手をそのようなことに使うのはイヤだったのだ。

それはあるいは少女らしい潔癖さゆえだったのかもしれない。しかし、やくざを道場から手を引かせるためには大金がいる。

そんな時に、あの女が現れたのである。

（相手が誰だろうと、負けられない）

あと一歩という近接した間合いで。

アイの動きが止まった。

と見るや、マイは前蹴りを出す。

相手の股間を狙った危険な蹴りだ。

女性は金的のような絶対的な急所ではないが、やはり股間は急所の一つであり、強打されたらただではすまない。

アイがそれに対してマイの右側に回り込もうとしたのは、かわしざまに足を掬い上げようとしたからであつたが、想いもかけずマイの蹴り足は上がらずに床に踏みおろされていた。

フエイント。

そして足が下ろされる直前にマイの左拳が肘を曲げられたままで振り回すようにアイの肩めがけて叩き込まれる。

フックに似た突き　鉤突きだ。

その速度というよりも鋭さに咄嗟に下がったアイだが、まだ余裕のある動きだった。

続けて繰り出された上段の右正拳突きもまた速く、鋭い。

マイの身長はアイよりも低くて、上段突きで繰り出されてもアイの胸の上部辺りめがけての攻撃となるのだが、アイはそれを左手を上げて捌きながら踏み込む。入り身。合気道は相手に合わせて入り込むという、入り身が身上の武道だ。

そこから右手でマイの左手を掴むか、さもなくば顎をすりあげるかして投げに持込もうとしていたが

マイの左手は下段から掬い上げるように打ち込まれている。

フルコンタクト系の空手で多用されている下段の下突きである。当たった。

「！　ツツツ！」

苦鳴を噛み潰したアイは、それでも動きを止めることなく左手を振りぬいた。

入り身の機に合わせ損なったそれは、ただの掌打だ。

それでも瞬間的に「臂力」を掛けた打撃はマイの顎を跳ね上げて押し飛ばす。

それは大したダメージになるような打撃ではなかった。その場で倒されたマイは即座に足を上げて跳ね起きるが、その時にはアイは間合いを五メートルほど作っていた。

「効いたでしょう」

マイは笑った。

精一杯作った、嘲る笑顔だ。

「結構ね」

アイは撃たれた右脇腹の下部に手を当て、言う。

「かなり、速い。それが、ムチミの使われた突きつてやつなんだ」
「……………」
マイの顔から笑みが消えた。

『古い空手には、ガマク、ムチミ、チンクチがあるという』
『師範クン、いきなり解らない言葉を出さなくてもいいと思っわよ』

『……………姐さんは茶々いれないの』

アイは生暖かい目で二人の夫婦漫才を眺めていた。
そう。

この時は、二人はそうなるものだと思っていたから。

『まあつまり、空手の、特に首里手とかあたりで重要になる身体技術なんだけどな。型とは、また違う』

『空手は型だつて教わったけど？』

『型は技のエッセンスであり、分解し、理解することによって使えるが、それを真に活かそうとしたら、それが必要になる。まあそれも型によって練るんだが』

『まあ要するに、中国武術で言う勁道とか発力なんだけどね』
『姐さん……………』

兄であり師範でもあるその若者は、溜め息を吐いてから解説を続けた。

『まずガマクというのは、肋骨と骨盤の間あたりだという話だ。流派やら解釈からで大雑把に丹田とか解釈されている場合もあるが、そんな大仰なもんじゃない。腰という程度の意味だ』

『中国でも腰の位置は日本より上の部分をさしているそうよ。沖縄は中国文化の影響が強いし、空手も原型は拳法だものね』

『……まあ要するに脇腹あたりの筋肉操作なんだがな。空手でいう場合のガマクは』

『より厳密には腰方形筋の操作にあたるわ。沖縄舞踊では古くから重視されていたし、ダンスでもこのあたりの操作は欠かせないのよ』

『……ダンスの場合は複式呼吸で鍛錬するそうだ。丹田と解釈している人はそのことからの誤解だろうなー』

『ガマクを操作することによって重心をある程度移動させることができるのよ。前に傾いた状態でも安定して立ったりとかね』

『……沖縄空手ではサーサンの型とかで練るそうだが』

『打撃の反発に負けないように、ガマクを入れて身体を固めるとかもするようね』

続いてムチミ、と兄は言った。

『簡単に言つとボクシングでいうとジャブとかに近い感じ』

『はあ……』

『腰を微かに震わせて、拳を飛ばすように打ち込むんだ』

『当てる瞬間に強く握りこむので、ジャブみたいなものと師範クンは言ったのね。ただ、どっちかというと通背拳に似た感じもするけど』

『……主に首里手の用語だというがな』

最後にチンクチ、となんだか投げやりに言う。

『一寸力とも書く。これも流派によって解釈は異なるが、那覇手系統では脇腹から背中にかけての筋肉を使つての打撃であるともいい、首里手では体重を掛けて威力を増すことだという』

『恐らくは中国武術でいうところの発勁のことだと思つわ。あちらも門派によつて勁の出し方が異なるから』

『……首里手ではナイファンチなどで鍛える。波返しとかの足を踏みおろす動作で、その時に膝を抜き、体重を拳にかける』

『拳を当ててから体重を掛けるので、自然と威力が増すのね』

なるほど、とアイは頷いた。

『ガマクを入れて重心を操作し、チンクチを掛けて体重を乗せ、ムチミを使つて拳を打ち込む』

およそ打撃系において、威力を出すのにこの上ない組み合わせだと言つた。

『しかし』

『合気道も、棄てたもんじゃないぞ』

『合気道は当身が七分に、投げが三分と言われてるわ』

『気を合わせる武道と書いて合気道だ』

「合気武道の当身も、見せてあげる」

アイは笑つた。

『あとハツタリも重要な』

兄はそうも言っていたのだと、思い出していた。

（合気道の当身……）

マイは思い出そうとする。

かつて父の弟子として学んでいた元合気道家の人は、何を言っていただろうか。

合気道における当身を、どういうものだと言っていただろうか。
よく思い出せない。
いや。

合気道における当身は、その指導体系においてメソッドとして欠けているから、空手を学んだと言っていたのではないのか。

（手刀とか投げの時に当てて崩すとか、そういうのだったと思うけど）

いずれ単発だったと記憶している。

ハツタリだ　　と思った先から、先ほどの掌打を思い出す。

下から顎をものすごい力で押し上げられた。

速さがなかったので打撃としてのダメージとはならなかったが、その場に倒されたのは確かだ。

もしも自分の下突きが先に決まっていなかったら、どうなっただろうか。

（　　関係ない）

敵の技を必要以上に恐れてはいけないのだと思った。

先に自分の技を決めてしまえばいい。

空手に先手なし、というが。

それは本土において精神論として発達した言葉なのだと父は言っていた。

あらゆる武術は先手をとることを目的としている。

後の先という言葉があるが、それは相手の動きを「先に」見極めているからこそできることなのだ。

マイが前に出した右足をの爪先を立てた猫足立ちに静かにアイの接近を待ったのは、先ほどの攻防で自分の打撃の方がより速く、自分の反応の方がより速いと思切ったがゆえである。

（間合いに入ったら即座に打つ）

合気道の当身というものがどういうものなのかは解らないが、同時に打撃を使えばムチミの分だけこちらが速いはずだ。

向こうのほうが身長も高いしリーチもあるだろうが、そんなことは関係ない。

と。

アイは進み、彼女の打撃の間に入る。

アイの拳なら届く距離である。

マイにとってはあと十数cmが必要な距離。

そこから淀みなく、さらに進む。

（ ！ ）

突いた。

中段の逆突きだ。

ムチミを使った打ち込みは腰を僅かに震わせて弾丸のように拳を飛ばす。

腰の回転ではなく震えから出される突きは予備動作が見えにくい。そして猫足立ちは重心を後ろに落としているように見えながらも、ガマクを効かせて見た目より重心は前に傾いていた。そして着弾の刹那後に猫足立ちの前に出した足の踵が床に下りて威力とするチンクチ。

古伝空手 首里手の基本と真髓の集約された一撃だった。
それでもこの人には通じないかも知れないとマイは思っている。
最初のこめかみを狙った打もこれの応用だったからだ。
しかし、それでもいいとマイは思っていた。
拳を捌かれようが続いての体捌きで相手を「型」にハメる。
練り上げられた「型」の技と体捌きは、ただの踊りではない。
その応用変化の中にはめこめば、相手はなす術もないはずだった。

合気道だろうとなんだろうと。

マイの拳はアイの臍の辺りを打ち

気がついたときには、マイの体は弾き飛ばされていた。

「!?」

床に倒されてから跳ね起き、さらに後方へと飛んだ。

アイはただ立っていた。

マイが立ち上がるのを見ると、再び歩き出す。

「…………ツ」

マイは臆面もなく後ろに下がった。

何をされたのかちつとも解らない。

確かに拳は目の前のアイという人のお腹を打ったはずだった。

拳の感触と踵を踏みおろし かけた感触は残っている。

(踵が床についた瞬間に、なんか飛ばされていた……)

投げられたのだろうか？

即座に否定する。

自分の触れた拳面以外の場所はある人には触っていない。

それは確かだった。

「どうしたの？」

「!」

アイとの距離がまた詰まっていた。

（打たれる前に）

前蹴り。

古い空手では、帯から上を打たなかったという。

打てなかったのではない。

打つ必要がなかったのだ。

首里手ではナイファンチの型にある波返しという動きがある。それは片足を上げておろすというだけであるが、その時に倒れこむことを学ぶ。

この動きはそのままチンクチの養成となり、足腰を鍛える鍛錬ともなるという、首里手の中でも最も重要な型としてナイファンチが上げられるのも無理からぬことなのだ。

この波返しの動きを蹴り技に応用したのが首里手の蹴りである。その際にガマクをかけることによって倒れながらも重心を保持し、倒れ掛かる瞬間に前へと重心を移動せることによってチンクチとなす。

近代の空手の試合では、前蹴りは相手の距離を開けるときに多用されるが、古伝の空手ではまさに必倒の威力を持つ技なのだ。

ましてマイの体は小さい。

体重の上下は威力を左右するが、体格の大小は攻防を左右する。

小柄なマイの前蹴りが狙ったのはアイの膝である。

合気道では下半身への蹴りを防御する動きはほとんどないはずであつた。

手で払おうにも低空の蹴りは捕るためにはしゃがまなくてはならない。

そんな僅かな行為ですらもが勝敗を別つ要因たりするのである。そして。

その瞬間、マイは確かにそれを見た。

自分の足が上がったか　と見えた瞬間、アイの歩みが加速したのを。

インパクトの瞬間、またもや後ろに飛ばされた。
今度もまた跳ね起きて、間合いを保つ。

アイは微笑みすら浮かべて歩み寄ってきた。

（この人は……！）

完全にこちらの動きを、インパクトのタイミングを掴み取っている。

マイはそう悟らざるを得なかった。

アイが何をやったのか？

それらは言葉でいうと簡単だ。

マイの打撃が最大威力を発揮する距離とタイミングを見切り、その直前に接触して力が乗り切る前に抑え込んだ。

それだけのことである。

その際に反作用で自分の方が負けないように重心を前に傾けて体中の伸筋を伸ばして……ということもしているのだが、このあたりは首里手における『ガマクを入れる』というのに近い作用がある。

野球などで、スイングのタイミングが合えば剛速球だろうと反発を感じることなく打ち返せることがあるが、恐らくは感覚としてはそれに近い現象である。

しかしこれらのことを空手家の打撃に対して自らの体で実現するのには、どれほどの困難を乗り越えねばならないのか。

それを考えただけで。

（……勝てない）

そう思った。

諦観に支配され、心が折れそうになる。

いや。

「かつ」

脇を締めて右足を一つ分だけ前に出し、爪先を内側に寄せる
いわゆる三戦立ちをとり、息吹する。

そして脇を締めたままに右手を前にして左手を右手の肘の辺りに
添えた、手の甲を下に向けた構えをとる。

立ち方はいつの間にか三戦立ちからナイファンチ立ちを捻った、
右前の立ち方になっていた。

最初にアイに対峙したときの構えである。

（父さんの得意だった、父さんの本当の構え）

三戦で姿勢と心を安定させ、そこから父を想起させる構えをとっ
てから。

（だから、もう……）

構えを解いた。

（へえ）

アイはマイが両手を下ろしたのを、何処か感慨深そうに見た。

（そうなるんだ）

そうしてから、やや膝を緩めて微かに腰を落とした、踵から踏み
込む歩法で歩きだす。

腰の高さは変わらず、滑るようで安定したそれは。

（自然な動きだ）

沖縄に古くから伝わるとされる古武術に、本部御殿手というもの
がある。

その歩法は膝を曲げずに踵から踏み出すというものと聞いてい
る。

正中線を保持したその姿勢は変幻自在の動きが可能であるという。

マイのそれは御殿手に近いものだった。

アイもまた歩き出す。

合気道もまた、歩法を重視する武術である。

現代武道の中で唯一、多人数との戦いを想定されてた。

その運足は開祖が新陰流の【まろばし転】より取り入れたとも、古くから伝わるものだとも言われている。

こちらに変転自在を旨とする術理であつた。

つまり二人の少女は、別々の流儀を学びながらも、同じ戦術をとつたのだ。

マイはアイに自分の打撃の機が掴まれているということを察知した時、今の自分の実力では及ばないと見切った時、一度、全てを諦めた。

諦めたということは心が折れたということであり、心が折れたということとは死んだということである。

ならばここで降伏しても打倒されても同じであり、至る結末は同じだということだった。

道場はやくざ者たちの手に落ち。

自分は敗北の代償を払わされる。

仕方の無いことだ。

今の自分では勝てないのだから。

その時、悟った。

今の自分で勝てないのなら。

別の自分になればよい。

今の自分にあるのは空手だった。

父より伝えられた空手だけだった。

ならば、簡単だ。

父の空手を捨てれば、今の自分ではなくなる。
それが道理だ。

だから、父の空手の構えをとったのは、亡くなった父のための供養であり。

それを解いたのは、父の空手を捨てる決別であった。

そうして進みだした時、彼女の心は無想だった。

自分の持っていたただ一つだけのものを捨てたのだから、もう何も考える必要はないのだとマイは思っていた。

だから何も考えないようにしよう。何も想わないようにしよう。
そして新たな自分がここから始まっていくのだと。

歩いていた。

（凄い。完全に脱力してる）

アイはマイが歩き出した時、数瞬遅れて進んだ。

どうしてそうしたのかよく解らないが、そうすべきだと考える。

（あの歩法は……）

話に聞く御殿手のそれなのか、見ただけでは判別できない。

ただ、このまま待ち受けてもいいものではないというのだけは解る。

全身から余分な力の抜けた空手使いの少女は、目の前でまったく新しい何かに変わったようだった。

ならば自分はどうするべきか
何も思い浮かばない。

そもそも、考えても仕方がないことだと思う。

自分はそう余裕のある立場ではない。

打たれた痛みをやわらげるために分泌された脳内物質は精神の集中を高め、一時的にアイのコンセントレーションを高めていた。

古い時代の武士の果し合いにおいて、先に浅く傷をつけられた者が勝つことが多かったというのも、そのような脳内物質の作用による。

アドレナリンやらドーパミンは、脳の機能を飛躍的に高める。

それが故にあの「呼吸投げ」は可能になったのだ。

相手の打撃を投げ返す、合気道における当身技。

それを打撃の使いに対して正面から使用などというのは、相手の機を掴み、自分の最大限の力を発揮できる瞬間を把握できる「呼吸力」を高めている者のみが可能にできる達人の領域の技である。

しかし、それだっていつまで続くか……。

（仕方ないなあ）

苦笑する。

痛みをごまかすために浮かべていた笑みではなく、心底から出たものだ。

自分は手負いで、相手はなんだか解らないが戦いの最中にパワーアップときた。

まるで漫画だ。

と思う。

（兄さんに聞いたことはあるけどね）

戦いの最中に、まれに集中力の高まりなど色々あって、その潜在能力を発揮するなどということが、漫画のようなフィクションではなくてありえると。

今のこの子は、そういうのでもないような気はするが。

（何か悟るところがあったのかも）

ゆっくりと回り込むように移動すると、踵を軸につま先を向けて

こちらに方向を修正された。

その様のあまりの自然さに、アイは背筋を走る震えを感じた。

（まいったなあ）

そう思いながら、しかし彼女は進む。

ここで負ける訳にはいかない。

しかしなんだか、勝てる気がしなかった。

勝算がなく戦う武術家などはいない。

それでもやっぱり戦う他はない。

（ああ、だったら、悔いは残さない）

相手が怪物だろうと達人だろうとなんだらうと、構わない。

覚悟を、決めた。

自分の全てで挑もう。

自分のありったけで戦おう。

立ち止まり、両手を臍の下、数センチのところに重ねて目を閉じる。

呼吸。

吸って、吐いて。

再び歩き出した時、彼女は無心だった。

全てを出しきるのに、全てをかけて戦うのに、迷うような心は不要だから。

心とは迷うものであり、惑うものである。

だからアイは心無くした。

心無くして自然となった。

思いのままに泣き、笑い、怒り、戦う、ひとでない何かになった。

心のない者は、すでに人間とは言えまい。

ならば、何も思わざる無想のマイも、人間ではなくなっている。

無想のマイも。

無心のアイも。

お互いの歩法の詳細は異なれど、身体操作技術の極限に達した自然の運足で歩み寄り、そして奇しくも最初の位置、二人が最初に交差した場所に立った。

僅かに背の高いアイにとっては必殺の間合いであり、微かに手の短いマイにとっては半歩にて必倒を可能とする距離だ。

自然と二人の視線は絡み合い。

無想のマイはアイを見て、何も思わなかった。

無心のアイはマイを見て、可愛いなと思った。

太い眉と大きな目と小さな唇とを。

アイは可愛いと思ったまま、両手を伸ばしてマイの頭を掴んで引き寄せる。

あまりにも自然な、害意も危機も感じない動きに、マイは反応できなかった。

そして、口づけた。

(え　　)

唇に感じた未知の感触に、マイは目を見開く。

この瞬間、マイの無想は崩れた。

両手を伸ばしてアイの肩を押したのには何の考えも思いもない、ただの反射的な動きだ。

焦燥と狼狽によって、衝動的に出した動きだ。

無心のアイは自分から離れようとしたマイに対して、何気なく両手をあげた。

せつかく距離を作れたのに、どうして差し出された、自分の顔の前に持ち上げられたアイの両手を掴んでしまったのか。

そこからの動きをなしたのは、何千もの日数積み重ねられた稽古の成果であつたらう。

アイの右手はマイの左手に掴ませてそれを天に導いた。
アイの左手はマイの右手を掴ませてそれを地に導いた。

そのままマイの両足のつま先を正三角形の底辺とする二点から生じる、三つつ目の方向へと、力が流れ

受身もとれず、マイの目の中に火花がいつぱいに咲いた。

（あ……）

そして真っ白になった視界は刹那の後にブラックアウトする。

合気道に云う、天地投げ。

かくて今宵の夜宴は終わり、
夜艶へと続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3257o/>

Night Party

2010年10月16日13時25分発行